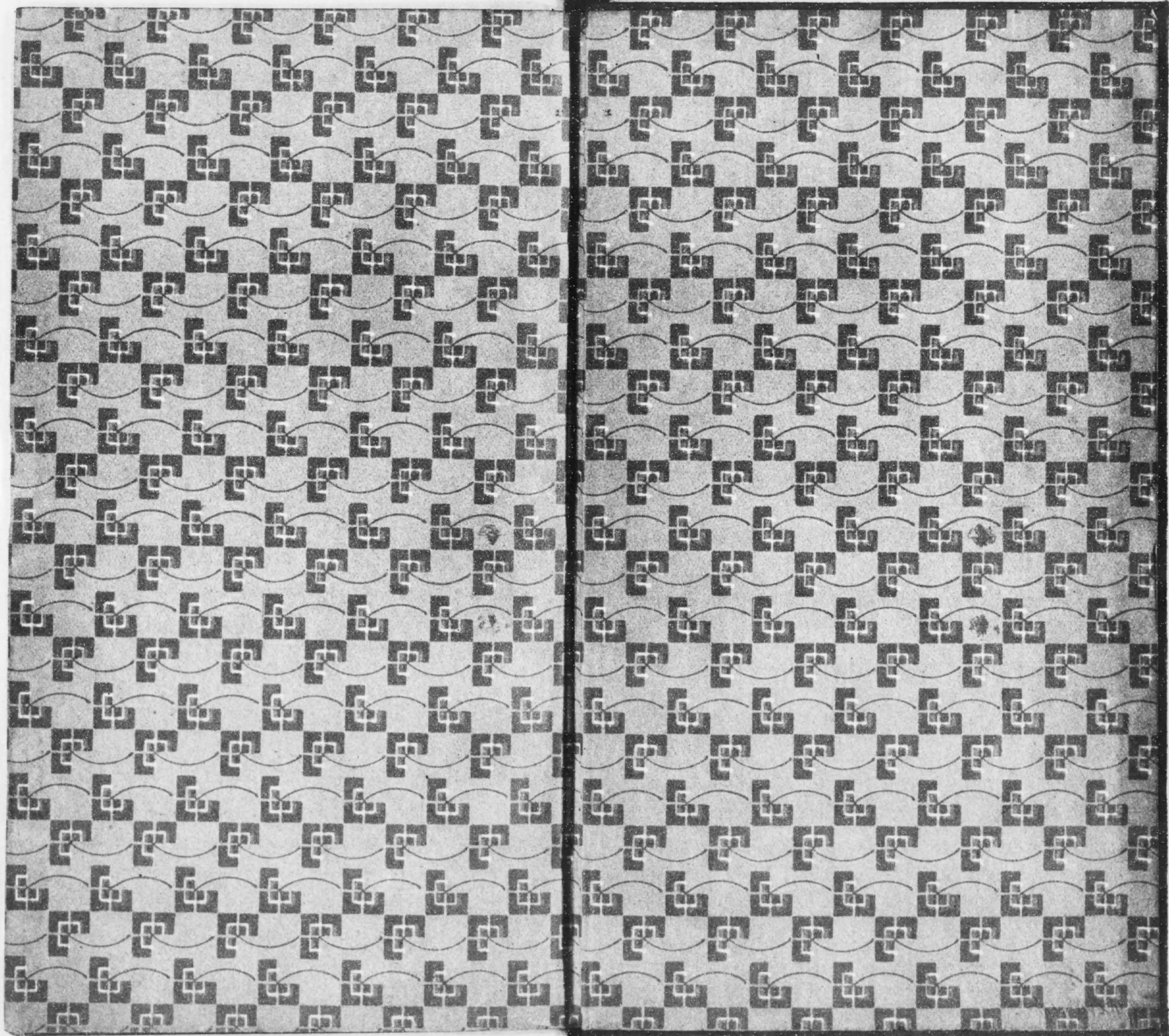
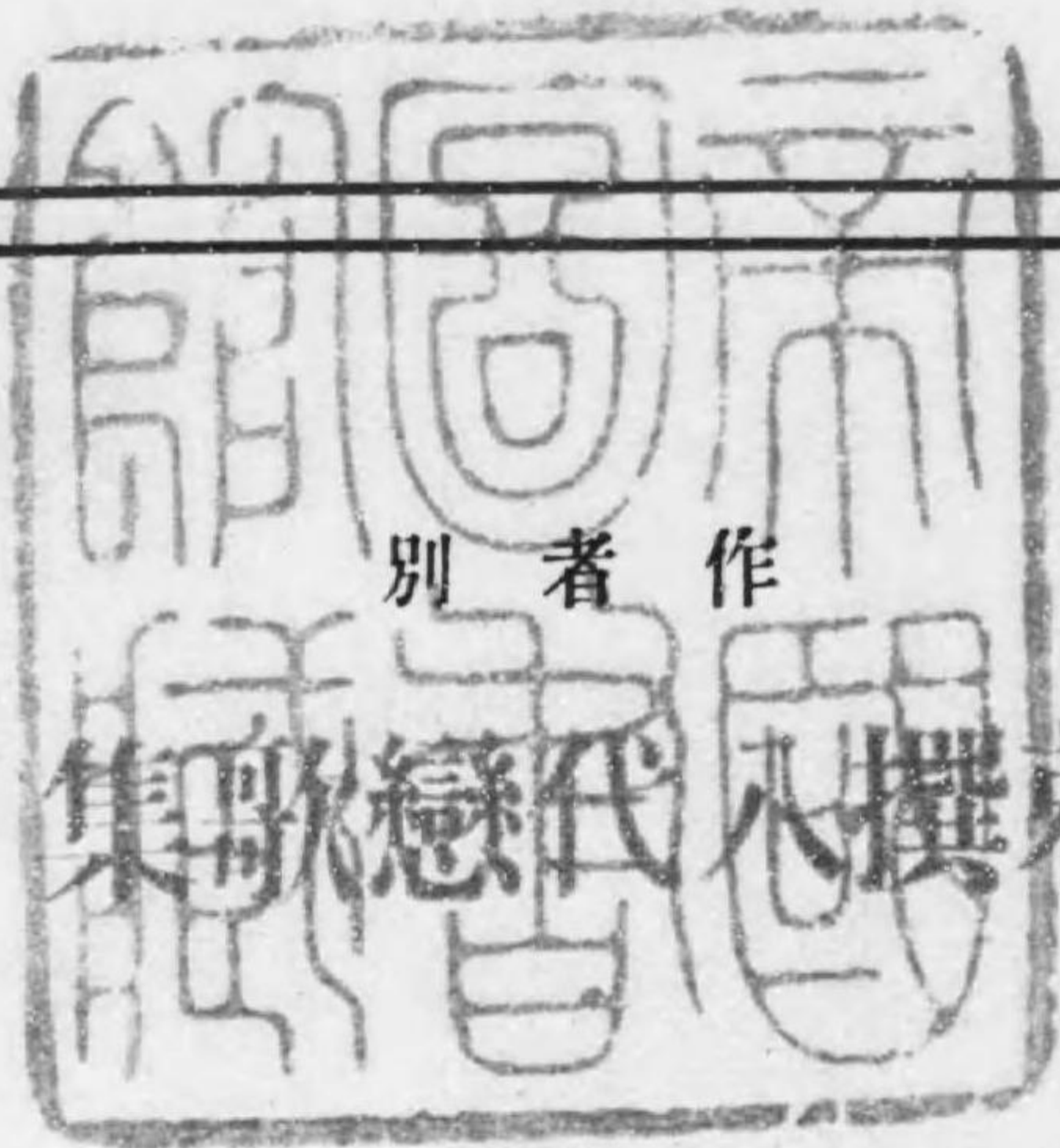


始





特109
999



別者作

勅撰八代戀歌集

勅撰八代集

新	千	詞	金	後	拾	後	古
古	載	花	葉	拾	遺	撰	今
今	和	和	和	遺	和	和	和
和	歌	歌	歌	和	歌	歌	歌
歌	集	集	集	歌	集	集	集
集	集	集	集	集	集	集	集

戀歌の部を輯む

吉田常夏編



序

平安朝時代は感情中心の時代である。鎌倉幕府時代から室町幕府時代までの佛法中心、徳川幕府時代の儒道中心と相並んで、否それらよりもすぐれた多くの點を有つ感情中心の時代である。感情を中心とすると、美の希求は必ず起る。この故に平安朝時代の人ことに貴族は、美をこれ趁うた、美ならむことをのみ考へた。而して力を極めて醜を排斥した。故に平安朝の諸現象ここに文學的現象は、すべて美の表はれてある。當時の男女間の關係を歌ひまた描いた文學も、またこの範圍にあるものである。

更に平安朝の文學は歌中心である。散文もある。ここに立派なものもある。しかしそれらは、歌の綜合から成つたものである。種々の歌様々の歌、それらの趣向、趣味、情趣、興趣を集め來つて、その縫合のあまの見えぬほど綴りあはせれば、自づから立派な散文が出来る。源氏物語などは乃ちそれである。而して、その歌は男女の關係が中心をつくる。戀愛から起る紛亂懊惱が主たる資料である。それから出る情味情調が、歌の價をして萬金にも換へ難くしたのである。而して更に散文をして、絢爛比なく、艶

麗類なく、後人をして驚嘆駭目するに到らしめたのである。

この故に、平安朝時代の男女の關係を歌つた歌は、當時の歌の中心であることにも、散文の中心でありまた當時代のすべての現象の中心である。平安朝を知悉しようとするものは、必ず目をここに著ければならぬ。これを研究しなければ、平安朝の眞は知りえられぬのである。この點から見ても、吉田君の編輯は、眞に意義ある仕事であると思ふ。これを書して成をまつことをする。

柴 舟 生

序

今からは十餘年も前の事である、常時は熱心に作詩をして居た友人吉田常夏君が、或日雑談の中に自分は八代集の戀歌を愛誦してやまない、書物など読んで居るだけでは飽き足らず、自身で一冊の寫本をして持つて愛誦して居る、そして何時かはこれを一部の書物として上梓したいと思つて居ることを熟意を帯びて話した事があった。ところが最近に同君に逢ふと、例の八代集の戀歌は、宿志が遂げられて漸く一部の書物となる事になつた。共々に喜んで、其書物の爲に何事かを述べる者となつて呉れこの事であった。

私は何よりも此舊友の文藝に對して深い愛着を持つて居る事を嬉しく思つた。云はれる通りに共々に喜ぶ心を述べようと思つた。しかし何を述べるべきだらうと思ふと、私は俄に當惑を感じて來た。一體は八代集に對して何事かを云ふべきであるが、それは現在の私には問題が大き過ぎて、新しくは何事も云ふ事が出來ない。又云はなくてはならない程度の事は、編者の吉田君が云つて居る筈で、繰返す必

要もない。それにもと／＼八代集といふ名は、既に其内容を語つて居るもので、今更これに對して生中な事をいふのは却つて滑稽な位なものである。

それでは何を云はうと思ふと、これは一讀書子としての私情ではあるが、私は此頃になつて、今一度心靜かに、八代集の戀の歌を読み直して見たくなつて來てゐる其事を云はうと思つた。

ありやうを云ふと、吉田君が八代集の戀歌を愛誦して居るを聞いた時には、寧ろ意外な事を聞かされるやうな感がした。私も其當時同じ歌を讀んで居た、しかし特別な興味を感じる事が出來ずに居た。それで、あの歌の何所がそれ程に面白いのだらうと怪んだのであつた。けれども今になつて思ふと、歌といふやうな微細な所に味ひのあるものは、其背景を取除いて味はうとするのは誤つて居る、平安朝といふ特別な背景を取除いて、單に抒情詩として八代集の戀歌を讀んで、直接の程度が足りない爲に面白くないと思つたのは、此方の準備が足りなかつたのである。

思ふに平安朝といふ時代は、繪巻物などから想像して、單に耽美的な享樂的な時代であつたやうにして居るのは大きな間違で、表面はさうも見えたらうが、裏面は案外にも複雑した、深刻な、謂はゆる現實味の豊かな時代であつたらう。外の事はさにかく、戀愛といふ一點では必ずさうであつたらう。如何さなれば此當時の廷臣は、結婚といふ事によつて權家を結ぶ事を外にしては、其生命とする立身の方法

が見出せなかつた。即ち私の生活だけには止まらず公の生活でもあつた。情の範圍だけの物ではなく理の範圍をも一緒にしたものであつた。男子がさうした態度を執つて居るとすれば、女子もそれに應じた態度を執らずには居られない。加へて當時は一夫多妻であつたので、女子の戀愛には絶えざる嫉妬と競争が伴つて居た。かうした戀愛の表現された歌には特殊な味ひがなくてはならない。殊に彼等はそれを表現するに當つて、胸中に於て醸された一睡の趣味を通して居る。其所に又別種の趣が添つて居る譯である。

今度讀むとしたならば、此平安朝の背景を心に置いて讀まう、さうしたならば表現の様式も、その然あるべき事も領み、その様式に蔽はれて、ともすれば隠されがちにならうとする現實味、人間味も解する事が出來て、八代集の戀歌は、必ず從來感じられなかつた光輝をもつて自分に對して來るだらう。さういふ風に現在の私は思つて居る。そして十餘年前に、よく此集を味讀して居た舊友吉田君に敬意を感じつつ、同時に八代集を讀み返す機会を早めて呉れるものとして、舊友の新著の上梓される日を待つて居る。

以上は單に私だけの心持であるが、私と心持を同じうするもの、或は似た心持をして居る者が随分多い事だらうと思ふ。殊に此頃讀書界には、我國の古典を今一度讀み返して見ようとする傾向が加はつて來て居るのを觀て、一層に其事が思はれる。幸にさういふ結果が得られ、舊友吉田君の多年抱いて來た

精神も汲まれ、歌界もそれによつて何等か寄與されるもののある事を友人として冀つて居る。

窪田空穂

序

昔の人の戀は單純でした。又のんきでした。けれども戀する者が相對ふ心、相慕ふ心、相食む心、相愛する心には少しも變りはないのです。昔の人は知るべきことを知らなかつただけです、深く感じても深く表はせなかつただけです。

八代集以後の戀歌は、同じ戀の歌でも一時は技巧の末に墮ちてゐますが、八代集並に萬葉集の戀歌は眞面目な歡樂、眞面目な苦悶を訴へてゐます。現にわれ／＼に流れてゐる血は、萬葉集や八代集時代の歌人から繼承してゐるのです、何うして其傳統を否むことが出来ませう。

一首一首檢してゆくさ、戀歌といふ中にも戀歌でない歌があるやうですし、戀歌といはない歌の中にも好い戀歌があるやうですけれど、大きく觀やうとするには、何うしても一首一首凡ての戀歌を通過しないと分らないやうです。その意味でこの歌集はよい思ひつきでした。

集中の或る一首に尊敬を拂ふ人も、凡ての戀歌に同情を持つ人も、等しく喜んで見る歌集でせう。

大正七年暮春

河井 醉茗

勅撰 八代戀歌集

吉田常夏編



田代



の
御戀歌

あ

敦慶親王

二品式部卿、宇多帝五御子、號桂御子、延喜四年薨

源賴が女、男のここかしこに通ひすむ所多くて、常にしも訪ざりければ、女も亦色好みなる名立ちけるを恨み侍りける返事に、「つらしともいかが恨みむ時鳥我が宿ちかく鳴く聲はせで」と詠みける御返し

(後撰)

里ごとになきこそわたれ郭公すみ家さだめぬ君たづぬとて

深くのみ思ふ心は蘆の根のわけても人に逢はむとぞ思ふ

女三の女王に

うき沈む淵瀬に騒ぐ鳩鳥は底ものどかにあらじとぞ思ふ

敦道親王

三品太宰帥 冷泉帝御子

秋の夜の有明の月の入るまでに憩らひかねて歸りにしかな

(新古今)

九月十日餘りに夜ふけて和泉式部が門を叩かせ侍りけるに、聞きつけざりければ朝につかはしける

一條院

諱懷仁、圓融帝御子

春立ちける日、承香殿女御のもとへつかはしける

よとともに戀ひつつ過ぐる年月は變れど變る心地こそせね

(同花)

り

宇多天皇

諱定省、號寛平法皇、光孝帝御子

大空をわたる春日の影なれや他にのみして長閑けかるらむ

(新古今)

帝王 3、5、7

帝王 り、か、く

小八條の御息所につかはしける

手枕に貸せる袂の露けさは明ぬと告ぐる涙なりけり

か

覺性法親王

二品號紫金臺寺、鳥羽帝御子

暮戀故人といへる心を

亡き人を思ひ出でたる夕ぐれは恨みしことぞ悔しかりける

（千載）

く

光孝天皇

諱時康、號小松帝、仁明帝三御子

久しく参らぬ人に

君がせぬわが手枕は草なれや涙の露の夜な夜なぞ置く

（新古今）

涙のみうき出づる蟹の釣竿の長き夜すがら戀ひつつぞ寝る

逢はずしてふる頃ほひのあまたあれば遙けき空に眺めをぞする

花山院

諱師貞、冷泉帝御子

昔御覽じける人の、近き程にわたりける由聞かせ給うて遣しける

よそにては中々さてもありにしを轉て物思う昨日今日かな

（千載）

三條關白女御入内の朝につかはしける

朝ほらけおきつる霜の消えかへり暮れ待つほどの袖を見せばや
終夜きえかへりつるわが身かな涙の露に結ほほれつつ

（新古今）

こ

帝王 く、こ

帝王と
後冷泉院

諱親仁、後朱雀帝御子

七月七日、二條院の御方に奉らせ給ひける
逢ふことは柵機女に貸しつれど渡らまほしき鵲の橋

(後拾遺)

後朱雀院

諱敦良、一條帝御子

東宮と申しける時、故内侍の督のもとにはじめて遣はしける
仄かにも知らせてしがな春霞かすみのうちに思ふ心を

(後拾遺)

陽明門院、皇后宮と申しける時、久しく内に参らせ給はざりければ、五月五日
内より奉らせ給ひける

菖蒲草かけし袂の音を絶えて更に戀路を迷ふころかな

麗景殿女御参りて後、雨降り侍りける日、梅壺の女御に
春雨の降りしくころは青柳のいと亂れつつ人ぞ戀しき

(新古今)

小一條院

諱敦明、後一條御時春宮、三條帝御子

女御藤原生子、右の御返しとして「青柳のいと亂れたるこの頃はひと筋にしも
思ひよられじ」とありければ、又つかはしける
青柳の糸はかたがた靡くとも思ひそめてむ色は變らじ

五月五日、はじめたる女のもとにつかはしける

知らざりき袖のみ濡れて菖蒲草かかる戀路に生ひむものとは

(金葉)

後白河院

諱雅仁、鳥羽帝御子

逐日増戀といへる心をよませ給ひける
戀ひわぶる今日の涙に比ぶれば昨日の袖は濡れし數かは

(千載)

位の御時、皇太后宮はじめてまゐり給へりける後の朝につかはしける

帝王と

帝王 一

萬世を契りそめつる微には徐々今日の暮れぞ久しき

同じ御時、忍びて初めて詣り上りて侍りける人に、朝政の程紛れさせ給ふことありて、暮れにける夕つかた遣はされける

かねてより思ひしことぞ伏し柴のこるばかりなる歎きせむとは

上のなの共、老後戀といへる心を仕まつりけるによませ給ひける

思ひきや年の積るは忘られて戀の命の絶えむものとは

近衛院

諱體仁、鳥羽帝御子

忍戀の心を

戀ひしともいはば心の行くべきに苦しや人目つつむ思ひは

(新古今)

後鳥羽院

諱尊成、高倉帝御子

小野宮の歌合に忍戀の心を

わが戀は楨の下葉に漏る時雨濡るとも袖の色にいでめや

水無瀬になのことも、久戀といふ事をよみ侍りしに

思ひつつ經にける年の甲斐やなきただあらましの夕暮れの空

戀歌として

頼めずば人を待乳の山なりと寝なましものを十六夜の月

百首の歌の中に

忘らるる身をしる袖の村雨につれなく山の月は出でけり

水無瀬戀十五首歌合に

里は荒れぬ尾上の宮のおのづから待ち來し宵も昔なりけり

是忠親王

一品式部卿、光孝帝御子

帝王 二

帝王 ことば

いと忍びたる女にあひ語らひて後、人目をつつみて又逢ひ難く侍りければ
あふ事は片糸ぞとは知りながら玉の緒ばかりなによりけむ

(後撰)

惟明親王

三品、高倉帝御子

百首の歌の中に戀の心を

逢ふことのむなしき空のうき雲は身を知る雨のたよりなりけり

(新古今)

よ

貞數親王

四品、清和帝御子

桂の女王に棲み初めける間に、彼の女王あひ思ほぬ氣色なりければ

人知れず物おもふ頃の我袖は秋の草葉に劣らざりけり

(後撰)

貞元親王

四品號閑院、清和帝三御子、承平元年薨

土佐が許より消息侍りける返事につかはしける

深緑染めけむ松の縁あらば薄き袖にも浪は寄せてむ

(後撰)

し

白川院

諱貞仁、三條帝御子

上のをの、ども、處の名を探りて歌奉り侍りけるに、逢阪の關の戀をよませ給へる

逢阪の名をも頼まじ戀すれば關の清水に袖も濡れけり

(後拾遺)

崇徳院

諱顯仁、鳥羽院御子

帝王 ことば

帝王 し、す

瀬を早み岩に堰かるる瀧川のわれても末に逢はむとぞ思ふ

百首の歌召しける時、戀の歌とてよませ給ひける

歎くまに鏡の影もおとろへぬ契りしことの變るのみかは

す

朱雀院

諱寛明、延喜帝御子

女御の下に侍りけるにつかはしける

玉銚の道は遙かにあらねどもうたて雲井に惑ふ比かな

輔仁親王

无品號三宮、後三條帝御子

いかにせむ思ひを人にそめながら色に出じと思ふ心を

た

醍醐天皇

諱敦仁、享子院御子

中將更衣、まかり出でて御文つかはしたりければ、「今日過ぎば死なましものを夢にても何處を墓と君が訪はまし」とありつるに、御かへし

現にぞとうべかりける夢とのみ惑ひし程や遙けかりけむ

長明の皇子の母の更衣、里に侍りけるに遣しける

他にのみまつは果敢なき住の江の行きてさへこそ見まくほしけれ

延喜御時、按察のみやす所、久しく御勤事にて御めのことにつけてまゐらせける、「世の中をつれなき物と聞きしかどつらき事こそ久しかりけれ」とありければ、御かへし

つらきをば常なきものと思ひつつ久しき事を頼みやはせぬ

帝王 た

帝王 た

中將更衣につかはしける

紫の色に心はあらねども深くぞ人を思ひそめつる

近江更衣にたまはせける

はかなくも明けにけるかな朝露のおきての後ぞ消えまさりける
東路あづまぢにかるてふ萱かやの亂れつつ束つかの間もなく戀ひや渡らむ

久しくまゐらざりける人に

霜しも騒さわぐ野邊のべの草葉くさばにあらねどもなどか人目のかれまさるらむ

辨更衣、久しく参らざりけるに賜はせける

雲井なる雁かりだに鳴きて來る秋になどかは人のおとづれもせぬ

高倉院

諱憲仁、後白河帝御子

今朝けさよりはいとど思ひをたき増して歎きこりつむ逢阪の山

(古今)

常康親王

元品、仁明帝御子

吹き迷ふ野風を寒み秋萩の移りも行くか人の心の

(古今)

天智天皇

諱葛城、舒明帝御子

梓弓あづさゆみひき野のつづら末つひに我が思ふ人にことの繁しほけむ

(古今)

(この歌は或人あめの帝、近江の采女に給ひけりとなむ申す)

帝王 つて、は

帝王 仁、み

二條院

諱守仁、後白河帝御子

後の宮にはじめて参りける女房琴弾くを聞かせ給ふて詠み給ひける

琴の音に通ひそめぬる心かな松吹く風にあらぬ身なれど

(平歌)

忍びて暮れにまう上るべき由侍りける人につかはしける

などやかかくさも暮れがたき大空ぞわが待つことはありと知らずや

人につかはしける

知るらめや落つる涙の露ともに別れの床に消えて戀ふとは

睦月の朔日頃忍びたる處につかはしける

誰れもよもまだ聞きそめじ鶯の君にのみこそ音しはじむれ



帝王の御戀歌

帝王 ち

あ

敦慶親王

二品式部卿、宇多帝五御子、號桂御子、延喜四年薨

源頼が女、男のこゝかしこに通ひすむ所多くて、常にしも訪ざりければ、女も亦色好みなる名立ちけるを恨み侍りける返事に「つらしともいかが恨みむ時鳥我が宿ちかく鳴く聲はせで」と詠みける御返し

里ごとになきこそわたれ郭公すみ家さだめぬ君たづぬとて

深くのみ思ふ心は蘆の根のわけても人に逢はむとぞ思ふ

女三の女王に

うき沈む淵瀬に騒ぐ鳩鳥は底ものどかにあらじとぞ思ふ

敦道親王

三品太宰帥 冷泉帝御子

秋の夜の有明の月の入るまでに憩らひかねて歸りにしかな

九月十日餘りに夜ふけて和泉式部が門を叩かせ侍りけるに、聞きつけざりければ朝につかはしける

一條院

諱懷仁、圓融帝御子

よとともに戀ひつつ過ぐる年月は變れど變る心地こそせね

春立ちける日、承香殿女御のもとへつかはしける

宇多天皇

諱定省、號寛平法皇、光孝帝御子

大空をわたる春日の影なれや他にのみして長閑けかるらむ

帝王 あ、い、り

帝王 ち、か、く

小八條の御息所につかはしける

手枕に貸せる袂の露けさは明ぬと告ぐる涙なりけり

か

覺性法親王

二品號紫金臺寺、鳥羽帝御子

暮戀故人といへる心を

亡き人を思ひ出でたる夕ぐれは恨みしことぞ悔しかりける

千載

く

光孝天皇

諱時康、號小松帝、仁明帝三御子

久しく参らぬ人に

君がせぬわが手枕は草なれや涙の露の夜な夜なぞ置く
涙のみうき出づる蜚の釣竿の長き夜すがら戀ひつつぞ寝る
逢はずしてふる頃ほひのあまたあれば遙けき空に眺めをぞする

(新古今)

花山院

諱師貞、冷泉帝御子

昔御覽じける人の、近き程にわたりける由聞かせ給うて遣しける

よそにては中々さてもありにしを轉て物思う昨日今日かな

(千載)

三條關白女御入内の朝につかはしける

朝ほらけおきつる霜の消えかへり暮れ待つほどの袖を見せばや
終夜きえかへりつるわが身かな涙の露に結ほほれつつ

(新古今)

こ

帝王 ち、く、こ

帝王 こと

後冷泉院

諱親仁、後朱雀帝御子

七月七日、二條院の御方に奉らせ給ひける
逢ふことは柵機女に貸しつれど渡らまほしき鵲の橋

(後拾遺)

後朱雀院

諱敦良、一條帝御子

東宮と申しける時、故内侍の督のもとにはじめて遣はしける
灰かにも知らせてしがな春霞かすみのうちに思ふ心を

(後拾遺)

陽明門院、皇后宮と申しける時、久しく内に参らせ給はざりければ、五月五日
内より奉らせ給ひける

菖蒲草かけし袂の音を絶えて更に戀路を迷ふころかな
麗景殿女御参りて後、雨降り侍りける日、梅壺の女御に
春雨の降りしくころは青柳のいと亂れつつ人ぞ戀しき

(新古今)

小一條院

諱敦明、後一條御時春宮、三條帝御子

五月五日、はじめたる女のもとにつかはしける
知らざりき袖のみ濡れて菖蒲草かかる戀路に生ひむものとは

(金葉)

後白河院

諱雅仁、鳥羽帝御子

逐日増戀といへる心をよませ給ひける
戀ひわぶる今日の涙に比ぶれば昨日の袖は濡れし數かは

(千載)

帝王 こと

位の御時、皇太后宮はじめてまゐり給へりける後の朝につかはしける

帝王

萬世を契りそめつる微には徐々今日の暮れぞ久しき

同じ御時、忍びて初めて詣り上りて侍りける人に、朝政の程紛れさせ給ふことありて、暮れにける夕つかた遣はされける

かねてより思ひしことぞ伏し柴のこるばかりなる歎きせむとは
上のをの、共、老後戀といへる心を仕まつりけるによませ給ひける

思ひきや年の積るは忘られて戀の命の絶えむものとは

近衛院

諱體仁、鳥羽帝御子

忍戀の心を

戀ひしともいはば心の行くべきに苦しや人目つつむ思ひは

(新古今)

後鳥羽院

諱尊成、高倉帝御子

小野宮の歌合に忍戀の心を

わが戀は楨の下葉に漏る時雨濡るとも袖の色にいでめや

水無瀬にをのことも、久戀といふ事をよみ侍りしに

思ひつつ經にける年の甲斐やなきただあらましの夕暮れの空

戀歌として

頼めずば人を待乳の山なりと寝なましものを十六夜の月

百首の歌の中に

忘らるる身をしる袖の村雨につれなく山の月は出でけり

水無瀬戀十五首歌合に

里は荒れぬ尾上の宮のおのづから待ち來し宵も昔なりけり

是忠親王

一品式部卿、光孝帝御子

帝王

帝王 ことば

いと忍びたる女にあひ語らひて後、人目をつつみて又逢ひ難く侍りければ
あふ事は片糸ぞとは知りながら玉の緒ばかりなによりけむ
(後撰)

惟明親王 三品、高倉帝御子

百首の歌の中に戀の心を
逢ふことのむなしき空のうき雲は身を知る雨のたよりなりけり
(新古今)

と

貞數親王 四品、清和帝御子

桂の女王に棲み初めける間に、彼の女王あひ思ほぬ氣色なりければ
人知れず物おもふ頃の我袖は秋の草葉に劣らざりけり
(後撰)

貞元親王 四品號閑院、清和帝三御子、承平元年薨

土佐が許より消息侍りける返事につかはしける
深緑染めけむ松の縁あらば薄き袖にも浪は寄せてむ
(後撰)

し

白川院 諱貞仁、三條帝御子

上の名のことも、處の名を探りて歌奉り侍りけるに、逢阪の關の戀をよませ給
へる

逢阪の名をも頼まじ戀すれば關の清水に袖も濡れけり
(後拾遺)

崇徳院 諱顯仁、鳥羽院御子

帝王 さし

帝王 し、す

瀬を早み岩に堰かるる瀧川のわれても末に逢はむとぞ思ふ

(詞花)

百首の歌召しける時、戀の歌とてよませ給ひける

歎くまに鏡の影もおとろへぬ契りしことの變るのみかは

(千載)

す

朱雀院

諱寛明、延喜帝御子

女御の下に侍りけるにつかはしける

玉鉾の道は遙かにあらねどもうたて雲井に惑ふ比かな

(新古今)

輔仁親王

无品號三宮、後三條帝御子

いかにせむ思ひを人にそめながら色に出じと思ふ心を

(千載)

た

醍醐天皇

諱敦仁、亭子院御子

中將更衣、まかり出でて御文つかはしたりければ「今日過ぎば死なましものを夢にても何處を墓と君が訪はまし」とありつるに、御かへし

現にぞとうべかりける夢とのみ惑ひし程や遙けかりけむ

(後撰)

長明の皇子の母の更衣、里に侍りけるに遣しける

他にのみまつは果敢なき住の江の行きてさへこそ見まくほしけれ

延喜御時、按察のみやす所、久しく御勤事にて御めのことにつけてまぬらせける、「世の中をつれなき物と聞きしかどつらき事こそ久しかりけれ」とありければ、御かへし

つらきをば常なきものと思ひつつ久しき事を頼みやはせぬ

帝王 た

帝王 た

中將更衣につかはしける

紫の色に心はあらねども深くぞ人を思ひそめつる

近江更衣にたまはせける

はかなくも明けにけるかな朝露のおきての後ぞ消えまさりける
東路あづまぢにかるてふ萱かやの亂れつつ束つかの間もなく戀ひや渡らむ

久しくまゐらざりける人に

霜騒さやぐ野邊のべの草葉くさばにあらねどもなどか人目のかれまさるらむ

辨更衣、久しく参らざりけるに賜はせける

雲井なる雁かりだに鳴きて來る秋になどかは人のおとづれもせぬ

高倉院

諱憲仁、後白河帝御子

今朝けさよりはいとど思ひをたき増して歎きこりつむ逢阪の山

(新古今)

常康親王

元品、仁明帝御子

吹き迷ふ野風を寒み秋萩の移りも行くか人の心の

(古今)

天智天皇

諱葛城、舒明帝御子

梓弓あづまゆみひき野のつづら末つひに我が思ふ人にことの繁しほけむ

(古今)

(この歌は或人あめの帝、近江の采女に給ひけりとなむ申す)

帝王 つて、は

帝王 仁、む
二條院

諱守仁、後白河帝御子

後の宮にはじめて参りける女房琴弾くを聞かせ給ふて詠み給ひける

琴の音に通ひそめぬる心かな松吹く風にあらぬ身なれど

忍びて暮れにまう上るべき由侍りける人につかはしける

などやかくさも暮れがたき大空ぞわが待つことはありと知らずや

人につかはしける

知るらめや落つる涙の露ともに別れの床に消えて戀ふとは

睦月の朔日頃忍びたる處につかはしける

誰れもよもまだ聞きそめじ鶯の君にのみこそ音しはじむれ



廣平親王

三品兵部卿、天曆帝御子、天祿二年九月二日薨

中將の御息所の許に萩につけてつかはしける

秋萩の下葉を見ずば忘らるる人の心をいかで知らまし



村上天皇

諱成明、延喜帝御子

天曆の御時、廣幡の御息所ひさしく参らざりければ御文つかはしける

山賤の垣穂に生ふる撫子に思ひ装へぬ時の間ぞなき

富士の山の型を造らせ給ひて、藤壺の御方へつかはすとて

世の人の及ばぬ物は富士の嶺の雲井にたかき思ひなりけり

右大臣女御うせ侍りにければ、父大臣のもとにつかはしける

古を更にかけじと思へども奇しく目にも滿つ涙かな

帝王 仁、む

帝王

頭かぶいたくなり侍りけるあしたに、宣耀殿の女御のもとにつかはしける
君をのみ思ひやりつつかみよりも心の空になりし宵かな

後の宮、久しく里におはしける頃つかはしける

葛くずの葉にあらぬ我が身も秋風の吹くにつけつつうらみつるかな

(新古今)

女御メノミ敷子女王、春になりてと奏し侍りけるが、さもなかりければ内よりいまだ
年としもかへらぬにやと、宣のたまはせたりける御返事を、楓の紅葉につけて「霞あせむらむ
程ほどなも知らず時雨れつつ過ぎにし秋の紅葉をぞ見る」とありし御返し

今こむと頼めつつふる言の葉ぞ常盤とこはに見ゆる紅葉なりける

廣幡の御息所につかはしける

逢ふことをはつかに見えし月影の朧おぼろろけにやは哀れとも思ふ

齊宮女御につかはしける

天あまの原はらそことも知らぬ大空おほそらに覺おぼ束つかなさを嘆きつるかな

齊宮女御、春の頃まかり出でて久しくまわり侍らざりければ
春ゆきて秋までとやは思ひけむかりにはあらで契りしものを
齊宮女御まわりけるに、いかなる事かありけむ

水の上の果敢なき数かずも思おもほえず深き心し底にとまれば

致平親王

四品兵部卿ムネヒラノミコ號明王院宮、天曆帝御子

女の他へまかるを聞きて

思ひやる心も空に白雲の出でたつ方を知らせやはせぬ

(新古今)



盛明親王

四品上總太守、延喜帝御子

帝王

帝王 春の夜の夢の徴は酷くとも見しばかりだにあらば頼まむ

元良親王

三品兵部卿、陽成帝一御子、天慶六年薨五十四

来や来やと待つ夕暮といまはとて歸る朝と何れまされる

(後撰)

理無といふこそ且つは嬉しけれ愚かならずと見えぬと思へば

大方はなぞやわが名の惜しからむ昔の妻と人に語らむ

忍びて通ひ侍りける女の許より狩装束送りて侍りけるに、摺れる狩衣侍りけるに

逢ふことは遠山鳥のかり衣きては甲斐なきねをのみぞ泣く

侘びぬれば今はたおなじ難波なるみをつくしても逢はむとぞ思ふ
侘びぬれば今はた同じ難波なるみをつくしても逢はむとぞおもふ (拾遺)

や

陽成院

諱貞明、清和帝御子

釣殿のみに遣しける

筑波根の峯より落つるみな川の戀ぞ積りて淵となりぬる

(後撰)

忍

圓融院

諱守平、天曆帝御子

帝王 帝も、や、

帝王 爰

圓融院御時、少將更衣のもとにつかはしける

かぎりなき思ひの空に満ちぬれば幾十の煙雲となるらむ

(拾遺)

朝臣の戀歌

あ

朝

光

正二位大納言左大將、藤原忠義公(兼通)男

女の許に物をだにいばむとてまかりけるに空しくかへりて朝に
消えかへりあるかなきかの我身かな恨みて歸る道芝の露

(新古今)

朝

忠

從三位中納言、三條藤原右大臣(定方)男、天曆六年參議
康保三年中納言同 薨五十七

女のものにとに遣しける

白浪のうち出づる濱のはま千鳥あとや尋ぬる導なるらむ

(後撰)

大輔が許にまうで來たりけるに侍らざりければ歸りて又のあしたに遣しける
徒らに立ちかへりにし白浪の名残りに袖の乾る時もなし

公頼朝臣の女に忍びてすみ侍りけるに、わづらふ事ありて死ぬべしといへりけ

れば遣しける

もろともにいざといはずば死出の山越ゆともこさむものならなくに

天曆の御時の歌合に

逢ふ事の絶えてし無くばなかなか人を身をも怨みざらまし

(拾遺)

天曆の御時の歌合に

人傳てに知らせてしかな隠れ沼のみこもりにのみ戀ひや渡らむ

(新古今)

敦

忠

從三位、中納言、本院藤原左大臣(時平)男、天慶二年
參議左中將、五年權中納言、六年薨二十八

わざとにはあらで、時時物いひふれ侍りける女の心にもあらで、人に誘はれて
まかりにければ、宿直物にかきつけて遣しける

かかりける人の心をしら露のおけるものとも頼みけるかな

(後撰)

忍びて棲み侍りける女につかはしける

あ

朝

光

正二位大納言左大將、藤原忠義公(兼通)男

女の許に物をだにいばむとてまかりけるに空しくかへりて朝に
消えかへりあるかなきかの我身かな恨みて歸る道芝の露

(新古今)

朝

忠

從三位中納言、三條藤原右大臣(定方)男、天曆六年參議
康保三年中納言同 薨五十七

女のものにとに遣しける

白浪のうち出づる濱のはま千鳥あとや尋ぬる導なるらむ

(後撰)

大輔が許にまうで來たりけるに侍らざりければ歸りて又のあしたに遣しける
徒らに立ちかへりにし白浪の名残りに袖の乾る時もなし

公頼朝臣の女に忍びてすみ侍りけるに、わづらふ事ありて死ぬべしといへりけ

れば遣しける

もろともにいざといはずば死出の山越ゆともこさむものならなくに

天曆の御時の歌合に

逢ふ事の絶えてし無くばなかなか人を身をも怨みざらまし

(拾遺)

天曆の御時の歌合に

人傳てに知らせてしかな隠れ沼のみこもりにのみ戀ひや渡らむ

(新古今)

敦

忠

從三位、中納言、本院藤原左大臣(時平)男、天慶二年
參議左中將、五年權中納言、六年薨二十八

わざとにはあらで、時時物いひふれ侍りける女の心にもあらで、人に誘はれて
まかりにければ、宿直物にかきつけて遣しける

かかりける人の心をしら露のおけるものとも頼みけるかな

(後撰)

忍びて棲み侍りける女につかはしける

朝臣 あ

逢ふことをいざ穂に出なむ篠薄忍びはつべき物ならなくに

御匣殿にはじめて遣しける

絶えぬると見れば逢ひぬる白雲のいとおほよそに思はずもがな

大輔がもとに遣しける

池水のいひ出づる事の難ければみごもりながら年ぞ經にける

西四條の前齋宮、まだ女王にもし給ひし時、志ありて思ふ事侍りける間に齋宮に定り給ひければ、その翌る朝に榊の枝につけてさしおかせ侍る

伊勢の海の千尋の濱に拾ふとも今は何てふかひかあるべき

忍びて御匣殿の別當にあひ語らふと聞きて、父の左大臣の制し侍りければ

いかにしてかく思ふてふ事をだに人傳てならで君に語らむ

雅忠が女にいひはじめ侍りける、侍従にはべりける時

身に泌みて思ふ心の年ふればつひに色にも出でぬべきかな

(拾遺)

朝臣 あ

いかでかはかく思ふてふ事をだに人づてならで君に知らせむ

あひ見ての後の心にくらぶれば昔は物も思はざりけり

結びおきし袂だに見ぬ花薄かるともかれじ君し解かずば

(新古今)

心にも任せざりける命もて頼めもおかじ常ならぬ世を

顯

隆

正三位中納言、參議藤原爲房男

白雲のかかる山路をふみ見てぞいとど心は空になりける

(金葉)

朝

綱

從三位參議、從四位下大江玉淵男、天徳元年薨七十二

物の賜ひける女の許に文遣したりけるに、心地悪しとて返事もせざりければ、又遣しける

足引のやまひはすともふみ通ふあとをもみぬは苦しきものを

(後撰)

女につかはしける

朝臣 あ
大島に水運びし早舟の早くも人にあひ見てしかな

顯アキ

輔スケ

正三位、正三位藤原顯季男

顯季卿の家にて人々戀の歌よみけるに詠める

逢ふと見て現のかひはなけれどもはかなき夢ぞ命なりける
女のもとにつかはしける

(金巻)

戀すてふもじの關守いく度かわれかきつらむ心つくしに

戀のこころをよめる

年経れど人も遊めぬ我戀や朽木の杣の谷の埋れ木

戀のこころを

戀ひ侘びて寝ぬ夜積れば數妙の枕さへこそ疎くなりけれ

後朝戀の心を

(金巻)

梓弓かへる朝の思ひには引きくらぶべき事のなきかな
思へどもいはでの山の年を経て朽ちや果てなむ谷の埋れ木
高砂の尾上の松に吹く風の音にのみやはきき渡るべき

附左大臣長實八條の家にて戀のこころをよめる

今はさは逢ひ見むまでは難くとも命とならむ言の葉もがな
よそにして焦躁しき人にいつしかと袖の雫を問はるべきかな
年ふれど哀れに絶えぬ涙かな戀しき人のかからましかば

顯アキ

仲ナカ

從三位神祇伯、六條源右府(顯房)男

曉戀をよめる

さりともと思ふかぎりは忍ばれて鳥とともにぞ音は泣かれける

(金巻)

朝臣 あ

忍戀の心をよめる

朝臣 あ

知らせばやほのみしま江の袖沾ぢて七瀬の淀に思ふこころを
人のもとにつかはしける

おのづから夜離るるほどの狭庭は涙のうきになると知らずや
物思ふといはぬばかりは忍ぶともいかがはすべき袖のしづくを

顯

家

正三位、刑部卿藤原重家男

晩風催戀といへる心をよめる

夜とともにつれなき人を戀草の露こほれ増す秋の夕風

(千載)

希會不絶戀

いかなれば流れは絶えぬ中川に逢ふ瀬の数の渺なかるらむ

有

家

從三位、刑部卿藤原重家男

攝政太政大臣の家の百首の歌合に曉戀

強顔さの類ひまでやは酷からぬ月をも愛でし有明の空
忘れじといひしばかりの名残りとしてその夜の月は廻は來にけり
來ぬ人をまつとはなくて待つ宵の更け行く空の月も恨めし
さらでだに怨みむと思ふ吾妹子が衣の裾に秋風ぞ吹く
物思はでただ大方の露にだに濡るれば濡るる秋の袂を

(古今)

顯

季

三位修理大夫、正四後下藤原隆經男、保安四年九月六日卒

鳴の臥す刈田にたてる稻莖のいなとは人のいはすもあらなむ
百首の歌の中に戀の心をよめる

(後拾遺)

わが戀は烏羽に書く言の葉のうつらぬほどは知る人もなし

(金葉)

俊忠卿の家にて、戀の歌十首人々よみけるに、立ちききて戀ふといへる事をよめ

朝臣 あ

朝臣 あり

吾妹子が聲たちききし唐衣その夜の露に袖は濡れけり

旅宿戀といへることをよめる

戀しさを妹しるらめや旅寢して山の雫に袖ぬらすとは

戀歌十首人々よみけるに來不留といふ事をよめる

玉津島岸打つ浪のたち返り背兄いでましぬ名残り久しも

堀河院の御時百首の歌奉りけるによめる

わが戀は芳野の山の奥なれや思ひいれども逢ふ人もなし

權中納言俊忠の家に戀の十首の歌よみ侍りける中に誓ふ戀といへる心をよめる

嬉しくは後の心を神も聽け引く注連繩の絶えじとぞ思ふ

(千載)

中院の右大臣、中將に侍りける時歌合侍りけるによめる

よとともに行く方もなき心かな戀は道なきものにぞありける

東人

四位、中納言中臣意美磨男

絶えずゆく飛鳥の川の淀みなば心ありとや人の思はむ

(古今)

朝頼

四位左大辨、左大臣藤原定方男、至康和二年

思ひかけたる女の許に

富士のねをよそにぞ聞きし今はわが思ひに燃る煙なりけり

(後撰)

顯綱

四位讚岐守、參議藤原兼經男、至康和二年出家

中納言俊忠が家の歌合によめる

紅の濃染の衣うへに着む戀の涙の色かはるとも

(詞花)

顯仲

四位左兵衛佐、中納言藤原資仲男、應徳三年正月五日叙從四位下

朝臣 あり

朝臣 忠

臥ながら無實戀

結びおく伏見の里の草枕解けでやみぬる戀にもあるかな

(千載)

顯

國

四位左少將、中納言源國信男、至嘉承六年

中納言俊忠卿の家にてたのめて逢はぬ戀といへる心をよめる

逢ひ見むと頼むればこそ吳服あやしやいかた立歸るべき

(金葉)

かくとだにまだ岩代の結び松結ほほれたるわが心かな

攝政左大臣の家にて時々あへりといへる事をよめる

わが戀は賤のしけ糸筋弱み絶え間は多くくるは少し

明

賢

四位彈正大弼、大納言源俊明男、至保安四年

戀の歌としてよめる

歎きあまり報せそめつる言の葉も思ふばかりは言はれざりけり

(千載)

有

文

五位伊勢守、右大臣藤原氏宗男、至天慶八年

方塞がりける頃、遠へにまかるとて

片時も見ねば戀しき君をおきてあやしや幾夜ほかに寝ぬらむ

(後撰)

有

好

五位左馬介、大納言藤原定國男、至延長元年

忍びて通ひける人に

あひみても慎む思ひの侘しきは人無間にのみぞ音は泣かれける

(後撰)

白き衣ども着たる女どものあまた月あかきに侍りけるを見て、朝に一人が許につかはしける

白雲のみな一叢に見えしかど立ち出て君をおもひ初めてき

朝臣 忠

朝臣 忠

臥ながら無實戀

結びおく伏見の里の草枕解けでやみぬる戀にもあるかな

(千載)

顯

國

四位左少將、中納言源國信男、至嘉承六年

中納言俊忠卿の家にてたのめて逢はぬ戀といへる心をよめる

逢ひ見むと頼むればこそ吳服あやしやいかた立歸るべき

(金葉)

かくとだにまだ岩代の結び松結ほほれたるわが心かな

攝政左大臣の家にて時々あへりといへる事をよめる

わが戀は賤のしけ糸筋弱み絶え間は多くくるは少し

明

賢

四位彈正大弼、大納言源俊明男、至保安四年

戀の歌としてよめる

歎きあまり報せそめつる言の葉も思ふばかりは言はれざりけり

(千載)

有

文

五位伊勢守、右大臣藤原氏宗男、至天慶八年

方塞がりける頃、遠へにまかるとて

片時も見ねば戀しき君をおきてあやしや幾夜ほかに寝ぬらむ

(後撰)

有

好

五位左馬介、大納言藤原定國男、至延長元年

忍びて通ひける人に

あひみても慎む思ひの侘しきは人無間にのみぞ音は泣かれける

(後撰)

白き衣ども着たる女どものあまた月あかきに侍りけるを見て、朝に一人が許につかはしける

白雲のみな一叢に見えしかど立ち出て君をおもひ初めてき

朝臣 忠

朝臣 あ

有^{アリ}時^{トキ}

五位左馬介、左少將藤原恒興男

逢ふことの歎きの本をたづぬれば獨^{ひとり}寝よりぞ生^おひはじめける
なけきこる山路は人も知らなくにわが心のみ常に行くらむ

(拾遺)

有^{アリ}親^{チカ}

五位内匠頭、伊豫守藤原定井男、至長保三年

あればこそ人も酷^{くら}けれあやしきは命もがなと頼むなりけり

(後拾遺)

顯^{アキ}廣^{ヒロ}

五位、藤原

心をばとどめてこそは歸りつれあやしや何の暮れを待つらむ

(詞花)

明^{アキ}兼^{カネ}

五位大判事明法博士、明法博士坂上範政男、久安三年十月廿九日卒

左京大夫顯輔の家にて歌合し侍りけるによめる

女の許に罷りたりけるに、親の諫むれば今はえなむ逢ふまじきといはせて侍りければよめる

堰^{せき}き止むる岩間の水もおのづから下^{した}には通ふものところ聞け

(詞花)

有^{アリ}房^{フサ}

五位齋院長官、神祇伯源顯仲男

洩^はらさばや忍びはつべき涙かは袖の柵^{しがらみ}かくとばかりは
思ふをも忘るる人はさもあらばあれ憂^{うれ}きをしのばぬ心ともがな

(千載)

章^{アキ}經^{ツネ}

五位、中原

戀ひ侘ぶる君に逢ふてふ言の葉は偽りさへぞ嬉しかりける
いかでかと思ふ人のさもあらぬさきに、さぞなど人の申しければよめる

(金葉)

有^{アリ}助^{スケ}

六位左衛門尉、御春、河内國人

文^あなくて夙^{また}なき名の立田川渡らでやまむ物ならなくに

(古今)

朝臣 あ

朝臣 あ、い
赤人 山邊
我が背子を那良志の岡の呼子鳥君呼びかへせ夜の更けぬ時
戀しくば形見にせむとわが宿に植ゑし秋萩いま盛りなり

(拾遺)



一條攝政

太政大臣二位伊尹謙徳公、右大臣師輔男、天徳三年薨

鈴鹿山伊勢をの海人の捨衣汐馴れたりと人や見るらむ

(後撰)

女のもとにつかはしける

人知れぬ身は急けども年を経てなど越え難き逢阪の關

大原野祭の日、櫛に挿して女のもとに遣すとて

大原野神も知るらむわが戀は今日氏人の心遣らなむ

(拾遺)

侍従に侍りける時、村上の先帝の御乳母に忍びて、物たうびけるにつき、何事なりとて更にあはす侍りければ

隠れ沼の底の心ぞうらめしきいかにせよとて強顔かるらむ

物いひ侍りける女の、後につれなく侍りて、さらに逢はす侍りければ

哀れともいふべき人は思ほえで身の徒らになりぬべきかな

いかなる折にかありけむ、女に

唐衣袖に人目は包めどもこほるるものは涙なりけり

(新古今)

つれなく侍りける女に、師走の晦日に遣しける

新玉の年にまかせて見るよりはわれこそ越えめ逢阪の關

正月雨降り風吹きける日、女につかはしける

春風の吹くにもまさる涙かなわが水上も氷解くらし

朝臣 い

朝臣 い

たびたび返事せぬ女に

水の上に浮きたる鳥の跡もなくおほつかなさと思ふころかな

冷泉院、皇子の宮と申しける時、侍ひける女房をみかばしていひ渡り侍りける頃、手習しける所にまかりて物にかきつけ侍りける

酷けれど恨みむとはた思ほえずなほ行くさきを頼む心に

忍びたるを、かりそめなる處に率て罷りて歸りて朝につかはしける

かぎりなく結び置きける草枕いつこの旅を思ひ忘れむ

思ひ出でて今は消ぬべし終夜おきうかりつる菊の上の露

うらむ事侍りて更にまうで來じと誓事して、二日ばかりありて遣しける

別れては昨日今日こそ隔てつれ千世しも經たる心地のみする

人しれぬ寢覺の涙ふりみちてさも時雨れつる夜半の空かな

久しくなりにける人の許へ

長き世の盡きぬ歎きの絶えざらばなにに命を代へて忘れむ

家イ通ト

從二位中納言、大納言藤原實通男

寄郷戀といへる心をよめる

逢ふことをさりとともとのみ思ふかな伏見の里の名を頼みつつ

(千載)

一向に恨しもせじ前の世に逢ふまでこそは契らざりけめ

女を恨みて今はまからじと申して後なほ忘れ難く覺えければ遣しける

つらしとは思ふものから伏柴のしばしもこりぬ心なりけり

(新古今)

家イ房フナ

從二位中納言、松殿關白藤原基房公男

攝政太政大臣の家の百首の歌合に

逢ふ事はいつと伊吹の峯に生ふるさしも絶えせぬ思ひなりけり

(新古今)

朝臣 り

朝臣

家隆

從二位、中納言藤原光隆男

暮れにとも契りて誰れか歸るらむ思ひたえたる曙の空
不二の峯の煙もなほぞ立ち昇る上なきものは思ひなりけり
忘るなよ今は心の變るとも馴れしその夜の有明の月
風吹かば嶺に別れむ雲をだにありし名残りの形見とも見よ

(千載)
(新古今)

千五百番歌合に

思ひ出でよ誰が豫言の末ならむ昨日の雲のあとの山風

和歌所の歌合に深山戀といふことを

さてもなほ訪はれぬ秋の夕端山雲ふく風も峯に見ゆらむ
しられじな同じ袖には通ふとも誰が夕暮れとたのむ秋風
思ひいる身は深草のあきの露たのめし末や木枯の風

百首の歌奉りしに

逢ふとみて事ぞともなく明けにけり果敢な夢の忘れ紀念や

家時

五位上野介、淡路守源盛長男、至永久六年

堀河院の御時、藏人に侍りけるに、贈皇后宮の御方に侍りける女を忍びて語ら
ひ侍りけるを、異人にもいふと聞きて、白菊の花にさしつかはしける

霜おかぬ人の心は移ろひて面がはりせぬ白菊の花

(詞花)

家實

五位、周防守藤原通宗男

忍傳書戀といへる心をよめる

磯がくれかきはやれども藻汐草たちくる浪にあらはれやせむ

(千載)

う

宇治前關白太政大臣

從一位攝政關白賴通公、御堂道長男

朝臣

朝臣 り お

枇杷殿の皇太后宮にまゐりて侍りけるに、辨の乳母の袴の腰のいでたるを、御前なる硯を引寄せてその腰に書きつけ侍りける

恨めしや結ほほれたる下紐のとけぬや何の心なるらむ

(千載)

浮

五位肥前守、大和守源精男、至承平三年

戀しさは寝ぬに慰さむともなきに奇しくあはぬ眼をもみるかな

(後撰)

お

大宮太政大臣

正二位伊通、大納言藤原宗通男

戀の心をよめる

山の井の岩もる水に影みれば淺ましけにもなりにけるかな
またもなくただ一筋に君を思ふ戀路に迷ふわれやなになる

(金葉)

(千載)

大炊御門右大臣

正二位公能、鑑大寺藤原實能男

新院くらゐにおはしましし時、うへのをのこ共御前に召して寢覺の戀といふ事をよませ給ひけるによめる

慰むる方もなくてや止みなまし夢にも人の強顔かりせば

(詞花)

百首の歌奉りける時、戀の歌とてよめる

大方の戀する人に聞き馴れて世のつねのとや君思ふらむ

(千載)

崇徳院に百首の歌奉りける時

わが戀は千木の片削ぎかたくのみ行きあはで年の積りぬるかな

(新古今)

乙

鷹

從三位中納言、左大臣石上鷹男

旅の思ひをのぶといふことを

足引の山越え暮れて宿からは妹立ち待ちに寢ざらむかも

(拾遺)

朝臣 お

朝臣 お

興風

六位河内大掾、相模掾藤原道成男

君戀ふる涙の床に満ちぬればみをつくしとぞわれはなりける
死ぬる命生きもやすると試みに玉の緒ばかりあはむといはなむ
侘びぬれば強いて忘れむと思へども夢といふ物ぞ人だのめなる

(古今)

親の守りける人の娘に、いと忍びにあひて物らいひける間に、親の呼ぶといひ
ければ、急ぎ歸るとて裳をなむ脱ぎ置きて入りにける、其の後裳を返すとてよ
める

逢ふまでの形見とてこそ停めけめ涙に浮かぶもくづなりけり
怨みても泣きてもいはむ方ぞなき鏡に見ゆる影ならずして

女の許より心ざしの程をなむ得知らぬといへりければ

わが戀を知らむと思はば田子の浦に立つらむ浪の數をかぞへよ
霜の上に跡ふみつくる濱千鳥行方もなしとねをのみぞなく

(新古今)

(後撰)

逢ひみても甲斐なかりけり烏羽玉のはかなき夢に劣る現は

大頼

六位菅博士、宗岳、大系副考菅家祖字庭五世宗岳從四位上三河
守大内記、延元六年卒、勘解由次官善主云々此人歌

冬川の上は凍れるわれなれや下に流れて戀ひ渡るらむ

か

河原左大臣

從一位源融、嵯峨帝御子

陸奥の信夫振摺り誰ゆるに亂れむと思ふわれならなくに

(古今)

閑院左大臣

正一位冬嗣、右大臣藤原内膳男

人のもとより曉かへりて

いつのまに戀しかるらむ唐衣濡れにし袖のひるまばかりに

(後撰)

朝臣 おか

朝臣か

兼輔

從三位中納言、右近中將藤原利基男、延長五年中納言、八年兼右衛門督、承平三年薨

よそにのみ聞かまし物を音羽川渡るとなしにみなれ初めけむ

(古今)

おのれを思ひ隔てたる心ありといへる女の返事に遣しける

難波潟苅りつむ蘆のあし筒の一重も君をわれやへだつる

(後撰)

辛うじて逢へりける女に、慎む事侍りて又得あはず侍りければ遣しける

あふ阪の木の下露に濡れしよりわが衣手はいまも乾かず

女の許にまかりたりける夜、門をさしてあけざりければ、まかり歸りて朝に遣しける

秋の夜の草の局の侘びしきは明くれどあけぬ物にぞありける

少將内侍、忍びて通ひ侍りける人、今歸りてなどため置きて、おほやけの使

に伊勢の國にまかりて歸り詣て来て後、久しう訪はず侍りければ、「人はかるこころの隈はきたなくて清き渚をいかで過ぎけむ」とよめるかへし

誰が爲めにわれが命を長濱の浦に宿りをしつつかは來し

朝臣か

兼茂

從四位下參議、右近中將藤原利基男、延長元年薨

冬の夜の涙に凍るわが袖の心とけずも見ゆる君かな

白雪の今朝は積れる思ひかな逢はでふる夜の程もへなくに
三香の原わきて流るる泉河いつみきとてか戀しかるらむ

(新古今)

女の許よりかへり侍りける程もなく、雪のいみじうふり侍りみれば

女の恨むる事ありて、親の許にまかり渡りて侍りけるに、雪の深く降りて侍りければ、あしたに女の迎へに車遣しける消息に加へて遣しける

ある所は知りながら、得逢ふまじかりける人につかはしける

渡津海の底の在所は知りながら潜きて入らむ浪の間ぞなき

(後撰)

兼覽王

義祇伯官内郷正四位下、惟喬親王御子

住の江のまつ程久になりぬれば蘆鶴の音になかぬ日はなし

(古今)

朝臣 か

人をいひはじめむとて

あし引の山下しけく這ふ葛のたづねて戀ふるわれを知らずや

(後撰)

相知りて侍りける人のまうで來すなりて後、心にもあらず聲をのみ聞くばかり

にて、又音もせず侍りければ遣しける、かりがねの雲井はるかに聞えしは今は

かぎりの聲にぞありける」とよめるかへし

今はとて行きかへりぬる聲なくば追風^{おいかぜ}にても聞えましやは

景式王

四位、惟條親王御子

唐衣なれば身にこそ纏^{まと}れめかけてのみやは戀ひむと思ひし

(古今)

兼盛王

雨やまぬ軒の玉水^{たまき}かずしらす戀しきことの増さるころかな

(後撰)

勝臣

五位阿波權掾、越後介藤原發生男

白浪のあとなき方に行く舟も風ぞたよりの導^{しるべ}なりける

(古今)

兼盛

五位駿河守、兵部大輔平篤行男、至天元二年

忍ぶれど色に出にけりわが戀は物や思ふと人の問ふまで

(拾遺)

逢ふことは片蹇^{かたがかり}する嬰兒^{みどりご}の立たむ月にも逢はじとやする

圓融院の御時の御屏風、八月十五日夜月の影、池に映れる家に、なとこ女めて懸想したる所

秋の夜の月みるとのみ起きるつつ今宵も寢でや我は歸らむ

屏風にみくま野のかた描きたる所

さしながら人の心のみ熊野の浦の濱木綿^{はまゆ}幾重なるらむ

戀そめし心のみぞ怨みつる人のつらさをわれになしつつ

(後拾遺)

朝臣 か

朝臣 ぬ

人知れず逢ふを待つ間に戀ひ死なば何に代へたる命とかいはむ
思ふてふ事は言はでも思ひけりつらきも今は酷しと思はじ

つらかりける女に

難波瀉渚の蘆のおひのよにうらみてぞふる人の心を

谷川の岩間をわけて行く水の音にのみやはきかむと思ひし

(詞花)

女をあひ語らひける頃、よしありて津の國に長柄といふ處にまかりて、彼の女の許に遣しける

忘るやとながらへ行けど身に添ひて戀しきことは後れざりけり

景

明

五位長門寺、大藏大輔源兼光男

絶えて年ころになりける女の許に罷りて、雪の降り侍りければ

み吉野の雪にこもれる山人もふる道とめてねをや泣くらむ

(谷邊)

女の許に罷りけるを、もとの女の制し侍りければ

風を甚み思はぬ方に泊りする蟹の小舟もかくや侘ぶらむ

あるかひもなきさに寄する白浪の間なく物思ふ我身なりけり

(新古今)

兼

隆

五位加賀介、但馬介源信孝男、至寛和四年

女の控へて侍りけるに、なまきけなくて入りにければ其翌朝遣しける

吾妹子が袖ふりかけし移り香の今朝は身に泌む物をこそ思へ

(後拾遺)

兼

昌

五位皇后宮少進、攝津守源俊輔男、至天永三年

岡信卿の家の歌合に初戀の心をよめる

けふこそは岩瀬の杜の下紅葉色に出づれば散りもしぬらめ

(金葉)

蔭

基

六位近江大掾、相模守藤原博文男、イ轉文男

朝臣 ぬ

朝臣かき

女の許に滯り初めて、朝に

飽かずして枕の上に別れにし夢路を又もたづねてしがな

(後撰)

方

見

イ像見、大伴

石の上ふるとも雨にさはらめや逢はむと妹にいひてしものを

(拾遺)

カ

清

蔭

正三位大納言、源陽成院御子、天慶四年薨

定國の朝臣の御息所、清蔭の朝臣と、陸奥の所々を盡して歌によみかはして、今は詠むべき所なしといひければ

さてもなほ籬が島のありければ立よりぬべくおもほゆるかな

(後撰)

御匣殿の別當につかはしける

身の成らむことをも知らず漕ぐ舟は浪の心も愼まざりけり

年をへて、語らふ人のつれなくのみ侍りければ、變ろひたる菊につけて遣しける

かくばかり深きいろにも變ろふをなほ君きくの花といはなむ

本院の東の對の君にまかり通ひて、朝に、

ふたつなき心は君におきつるを又ほどもなく戀しきや何ぞ

(拾遺)

忠房の女に許に久しう滯らでつかはしける

住吉のまつならねども久しくも君と寝ぬ夜のなりにけるかな

女王に通ひ初めてあしたに遣しける

明くといへば靜心なく春の夜の夢とや君を夜のみは見む

(新古今)

公任

正二位大納言、藤原廉義公男

朝臣

朝臣かき

女の許に滯り初めて、朝に

飽かずして枕の上に別れにし夢路を又もたづねてしがな

(後撰)

方

見

イ像見、大伴

石の上ふるとも雨にさはらめや逢はむと妹にいひてしものを

(拾遺)

カ

清

蔭

正三位大納言、源陽成院御子、天慶四年薨

定國の朝臣の御息所、清蔭の朝臣と、陸奥の所々を盡して歌によみかはして、今は詠むべき所なしといひければ

さてもなほ籬が島のありければ立よりぬべくおもほゆるかな

(後撰)

御匣殿の別當につかはしける

身の成らむことをも知らず漕ぐ舟は浪の心も愼まざりけり

年をへて、語らふ人のつれなくのみ侍りければ、變ろひたる菊につけて遣しける

かくばかり深きいろにも變ろふをなほ君きくの花といはなむ

本院の東の對の君にまかり通ひて、朝に、

ふたつなき心は君におきつるを又ほどもなく戀しきや何ぞ

(拾遺)

忠房の女に許に久しう滯らでつかはしける

住吉のまつならねども久しくも君と寝ぬ夜のなりにけるかな

女王に通ひ初めてあしたに遣しける

明くといへば靜心なく春の夜の夢とや君を夜のみは見む

(新古今)

公任

正二位大納言、藤原廉義公男

朝臣

朝臣

女の家近き處にわたりて七月七日につかはしける

(後拾遺)

雲井にて契りし中は柵機を羨むばかりなりにけるかな

仇々しくもあるまじかりける女を、いと忍びていほせ侍りけるに、世に散りて

煩はしき様に聞えければ、云ひ絶えて後年月を経て、思ひ餘りていひ遣しける

一度は思ひ絶えにし世の中をいかがはすべき賤の苧環

(詞花)

うるまの島の人、ここに放たれ来てこの人の物いふなきも知らでなむある

といふ比、返へり事せぬ女につかはしける

おほつかな宇留馬の島の人の人なれやわが言の葉を知らず顔なる

(千載)

左大將朝光、五節舞姫奉りけるかしづきを見てつかはしける

天津空豊の明りに見し人のなほ面影のしひて戀しき

(新古今)

五月五日、馬内侍につかはしける

時鳥いつかと待ちしあやめ草けふは如何なる音にか泣くべき

公

實

從二位大納言、大納言藤原實季男

つれなかりける女の許につかはしける

これにしく思ひはなきを草枕たびにかへすはいな菟とや

(金葉)

ある宮達に侍りける人の忍びて宮を出でて、あやしの小家にて物申して後、日

ごろありてつかはしける

思ひいづやありしその夜の吳竹はあさましかりしふし所かな

堀河院の御時の艶書合によめる

思ひあまりいかで洩らさむ奥山の岩垣こむる谷の下水

人にかばりて

白菊のかはらぬ色も頼まれず移ろはでやむ秋しなれば

女を恨みてつかはしける

朝臣

朝臣 ぎ

蘆根はふ水の上とぞ思ひしをうきはわが身にありけるものを

もろ共に郭公を侍ちけるに、さばる事ありて入りける後、鳴きつやなどたづねけるを聞きてよめる

郭公雲井のよそになりしかばわれど名残りの空に泣かれし

戀の歌としてよめる

逢ふことは舟人弱み漕ぐ舟の水脈逆上る心地こそすれ

源家時、堀河院の御時、藏人に侍りける女を忍びて語らひ侍りけるを、こと人にも言ふと聞きて、白菊の花に挿しつかはしける「霜おかね人の心はうつろひて面がはりせぬ白菊の花」とありしを、女にかはりて返し

白菊の變らぬ色もたのまれず移ろはでやむ秋しなれば

堀河院の御時、百首の歌奉りける時、戀の心をよみ侍りける

思ひあまり人に問はばや水無瀬川掬ばぬ水に袖は濡るやと

(千載)

(詞花)

ひとり寝るわれにて知りぬ池水に交はぬ鴛鴦の思ふ心を

堀河院の御時、百首の歌奉りける時、戀の心をよめる

堀河院の御時、艶書の歌をうへのをの、共に詠ませさせ給うて、歌よむ女房の許につかはしけるを、大納言公實は康資の王の母に遣はしけるを、又周防の内侍にもつかはしけると聞きて、猜みたる歌を送りて侍りければ遣しける

満つ潮の末葉を洗ふ流れ蘆の君をぞ思ふ浮きみ沈み

公 成 從二位中納言、中納言藤原實成男

五節に出でて、かひつくるひなどし侍りける女につかはしける

雲の上「にさばかり射しし日蔭にも君が氷柱は解けずなりにき

(後拾遺)

公 長 從二位、散位大中臣公定男

寄山戀といへる事をよめる

朝臣 ぎ

朝臣 登

戀ひ侘びて思ひ入方の山の端にいづる月日の積りぬるかな

(金葉)

公

衛

從三位、大炊御門右大臣藤原公能男

思ひながら色には出でざりけるを、女のもとにて鏡をかりて、その裏にかきつけ返し侍りける

増鏡心も映るものならばさりともし今は哀れとや見む

逢初戀の心をよめる

戀ひこひて逢ふ嬉しさを包むべき袖は涙に朽ち果てにけり

戀ひわびて野邊の露とは消えぬとも誰れか草葉をあはれとや見む (新古今)

清

行

四位讚岐守、大納言安倍安仁男、至寛平七年

下つ出雲寺に人の追善しける日、眞せい法師の導師にて云へりける言葉を、歌によみて小野小町がもとに遣しける

つつめども袖にたまらぬ白玉は人をみぬ眼の涙なりけり

(古今)

公

資

四位兵部大輔、薩摩守大江清公男、長久元年十一月七月卒

女のもとについはしける

しの薄上葉に巢がく蜘蛛のいか様にせば人なびきなむ

(金葉)

清

輔

四位皇太后宮大進、左京大夫顯輔男、治承元年六月廿日卒

難波女の檜焚く火の下焦れ上はつれなきわが身なりけり

(平歌)

戀の歌としてよめる

涙川うき寢のとりとなりぬれど人にはえこそみなれざりけれ

歌合し侍りける時よめる

しばしこそ濡るる袂も絞りしか涙にいまはまかせてぞ見る

朝臣 登

朝臣 ぎ

逢ふことは引佐細江の濔標深きしるしもなき世なりけり
朝夕に海松布を潜ぐ蟹だにもうらみは絶えぬものところ聞け

忍戀の心を

人知れずくるしきものは信夫山下這ふ葛のうらみなりけり

(新古今)

清正

五位左少將、中納言藤原兼輔男

逢ふことのよよをへだつる吳竹のふしの數なき戀もするかな

(後撰)

女の許につかはしける

情もなき人に負けじとせし程にわれも空名は立ちぞしにける

藤壺の人々、月夜に歩きけるを見て、一人がもとに遣しける

誰れとなく朧ろに見えし月影に分くる心を思ひしらなむ

人につかはしける

須磨の浦に蟹の樵り積む藻鹽木のからくも下に燃え渡るかな

(新古今)

夏の夜、女の許に罷りて侍りけるに、人靜まる程夜いたく更けあひて侍りければよめる

短夜の残りすくなく更けゆくはかねて物憂き曉の空

公忠

五位大外記、三統、至天曆三年

思ひやる心は常にかよへどもあふ阪の關越えずもあるかな

(後撰)

公誠

五位周防守、陸奥守平元平男、至寛弘八年

女の許にはじめて遣しける

忍ぶるも誰れゆゑならぬものなれば今は何かは君に隔てむ
逢ふことや涙の玉の緒なるらむしばし絶ゆれば落ちて亂るる

(拾遺)

(前花)

朝臣 ぎ

朝臣 ぎ

逢ふことは引佐細江の濔標深きしるしもなき世なりけり
朝夕に海松布を潜ぐ蟹だにもうらみは絶えぬものところ聞け

忍戀の心を

人知れずくるしきものは信夫山下這ふ葛のうらみなりけり

(新古今)

清正

五位左少將、中納言藤原兼輔男

逢ふことのよよをへだつる吳竹のふしの數なき戀もするかな

(後撰)

女の許につかはしける

情もなき人に負けじとせし程にわれも空名は立ちぞしにける

藤壺の人々、月夜に歩きけるを見て、一人がもとに遣しける

誰れとなく朧ろに見えし月影に分くる心を思ひしらなむ

人につかはしける

須磨の浦に蟹の樵り積む藻鹽木のからくも下に燃え渡るかな

(新古今)

夏の夜、女の許に罷りて侍りけるに、人靜まる程夜いたく更けあひて侍りければよめる

短夜の残りすくなく更けゆくはかねて物憂き曉の空

公忠

五位大外記、三統、至天曆三年

思ひやる心は常にかよへどもあふ阪の關越えずもあるかな

(後撰)

公誠

五位周防守、陸奥守平元平男、至寛弘八年

女の許にはじめて遣しける

忍ぶるも誰れゆゑならぬものなれば今は何かは君に隔てむ
逢ふことや涙の玉の緒なるらむしばし絶ゆれば落ちて亂るる

(拾遺)

(前花)

朝臣 ぎ

朝臣 ぎく

清文キヨフミ 五位、大中臣

落れども軒にしられぬ玉水たまみづは戀の長雨ながめの雫なりけり

清重キヨシゲ 六位、中原光重男 至建久七年

翌日中戀といへる心をよめる

涙にや朽ちはてなまし唐衣袖のひるまと頼めざりせば

(千載)



九條右大臣クドヤウダイシ 正二位師輔公、藤原真信公男

大輔につかはしける

色深く染めし袂の最いとしく涙にさへも濃こさ増まるかな

(後撰)

女四のみこにおくりける

蘆鶴あしたつの澤邊さわべに年けへぬれども心は雲の上うへにのみこそ

人の許につかはしける

隠かくれ沼ぬに住すむ鴛鴦うんおうの聲絶えず啼なけど甲斐なきものにぞありける

院のやまとに扇遣すとて

おもひにはわれこそ入りて惑はるれ文ふみなく君や涼しかるべき

右近につかはしける

思おもひ侘わび君がきみつらきに立ち寄らば雨も人目も漏らさざらなむ

忍しのびたる女の許もとよりなどか音こゑもせぬと申ましたりければ

小山田おやまだの水みづならなくにかくばかり流れ初はめては絶えむものは
澤さわにのみ年は経ぬれど蘆鶴あしたつの心は雲の上うへにのみこそ

忍しのびたる處ところよりかへりて朝につかはしける

侘わびつつも君が心こゝろに適あふとて今朝も袂たもとを干ほしぞ煩わづらふ

(新古今)

朝臣 ぐ

朝臣

九條内大臣

正二位良通公、後法性寺藤原兼實男

忍びかね今は我とや名告らまし思ひ捨つべき氣色ならねば

(中)

稱他人戀といへる心をよみ侍りける

國經

正二位大納言、權中納言藤原長良男

明けぬとて今はの心つくからになど言ひ知らぬ思ひ添ふらむ

(古)

國信

正二位權中納言、右大臣源顯房男

家の歌合に初戀を

色見えぬ心ばかりは鎮むれど涙はえこそしのばざりけり

(金)

家に歌合し侍りけるに、あうて逢はぬ戀といふことをよめる

逢ふこともわが心よりありしかば戀ひは死ぬとも人は怨みじ

(前)

邦正

四位左京大夫、源重明親王御子

侍従に侍りける時、女にはじめてつかはしける

いかでかは知らせ初むべき人しれず思ふ心の色にいでずば

(拾遺)

國用

五位陸奥守、左馬頭藤原季方男、至永延二年

さだもりが棲み侍りける女に、國用が忍びて通ひ侍りける程に、さだもりまうで來ければ、惑ひて塗籠に隠して後の戸より遁し侍りける、其翌朝いひつかはしける

宮造る飛驒の工匠の手斧の音ほとほとしかる目をもみしかな

(拾遺)

國基

五位住吉神主、神主津守忠康男、延久元年叙爵

ものいひける女の髪をかきこして見けるをよめる

朝寢髪誰が手枕に撓つけて今朝は形見に振越して見る

(金)

朝臣

朝臣

國房

五位石見守、玄蕃頭藤原範光男、至永保四年七月

唐衣袖師の浦のうつせ貝むなしき戀に年の經ぬらむ

(後拾遺)

遠き處なる女につかはしける

戀しさは思ひやるだに慰さむを心におとる身こそつらけれ

冬の夜の戀をよめる

おもひ侘びかへす衣の袂より散るや涙の氷なるらむ

國光

五位越中守、散位津守康基男、仁安三年十一月廿日叙外從五位下

日を経つつ茂さはまさる思草あふ言の葉のなどなかるらむ

(千載)

黒主

六位、大伴(玄旨抄云一説大伴王子曾孫與多王孫都堵牟磨子云々)

人を忍びにあひしりて逢ひ難くありければ、その家の邊りをまかり歩きける折

に雁のなくを聞きてよみつかはしける

思ひ出でて戀しきときは初雁のなきて渡ると人知るらめや

(古今)

白浪の寄する磯間を漕ぐ舟の梶とりあへぬ戀もするかな

(後撰)

玉津島ふかき入江を漕ぐ舟の浮きたる戀もわれはするかな

後法性寺入道前關白太政大臣

從一位攝政關白兼實公、法性寺藤原忠通公男

右大臣に侍りける時、家に歌合し侍りける時、戀の歌とてよみ侍りける

行きかへる心に人の馴るればや逢ひ見ぬさきに戀しかるらむ

(千載)

右大臣に侍りける時、百首の歌よませ侍る時、後朝の歌とてよみ侍りける

かへりつる名残りの空を眺むれば慰めがたき有明の月

朝臣

國房

五位石見守、玄蕃頭藤原範光男、至永保四年七月

唐衣袖師の浦のうつせ貝むなしき戀に年の經ぬらむ

(後拾遺)

遠き處なる女につかはしける

戀しさは思ひやるだに慰さむを心におとる身こそつらけれ

冬の夜の戀をよめる

おもひ侘びかへす衣の袂より散るや涙の氷なるらむ

國光

五位越中守、散位津守康基男、仁安三年十一月廿日叙外從五位下

日を経つつ茂さはまさる思草あふ言の葉のなどなかるらむ

(千載)

黒主

六位、大伴(玄旨抄云一説大伴王子曾孫與多王孫都堵牟磨子云々)

人を忍びにあひしりて逢ひ難くありければ、その家の邊りをまかり歩きける折

に雁のなくを聞きてよみつかはしける

思ひ出でて戀しきときは初雁のなきて渡ると人知るらめや

(古今)

白浪の寄する磯間を漕ぐ舟の梶とりあへぬ戀もするかな

(後撰)

玉津島ふかき入江を漕ぐ舟の浮きたる戀もわれはするかな

後法性寺入道前關白太政大臣

從一位攝政關白兼實公、法性寺藤原忠通公男

右大臣に侍りける時、家に歌合し侍りける時、戀の歌とてよみ侍りける

行きかへる心に人の馴るればや逢ひ見ぬさきに戀しかるらむ

(千載)

右大臣に侍りける時、百首の歌よませ侍る時、後朝の歌とてよみ侍りける

かへりつる名残りの空を眺むれば慰めがたき有明の月

朝臣

朝臣

朝臣と

百首の歌よませ侍りける時、遇不逢戀の心をよみ侍りける

長らへてかはる心を見るよりは逢ふに命を代へてましかば
惜みかねけにいひしらぬ別れかな月もいまはの有明の空

百首の歌よみ侍りける時、忍戀

忍ぶるに心の隙はなけれどもなほ漏るものは涙なりけり

忍戀の心を

しるらめや木の葉ふり敷く谷水の岩間に洩らす下の心を

片思ひの心を

わればかり酷きを忍ぶ人やあると今世にあらば思ひ合せよ

後京極攝政前太政大臣

從一位攝政關白良經公、後法性寺藤原兼實公男

契暮秋戀といへる心をよみ侍りける

戀をのみしぐるる空の浮雲は曇りもあへず袖ぬらしけり

(千載)

知られても厭はれぬべき身ならずば名をさへ人に愼まましやは

和歌所の歌合に久忍戀といふことを

石の上布留の神杉ふりぬれど色にはいです露も時雨も

(新古今)

家に歌合し侍りけるに、憂戀の心を

空蟬の啼く音やよそにもりの露干しあへぬ袖を人の問ふまで

百首の歌奉りしに

梶をたえ由良の湊による舟のたよりも知らぬ沖津汐風

和歌所の歌合に忍戀をよめる

難波人いかなる江にか朽ち果てむ逢ふことなみにみをつくしつつ

百首の歌奉りし時、戀歌

戀をのみすまの浦人藻鹽垂れ干し敢へぬ袖の果てを知らばや

朝臣と

朝臣と

左大將に侍りける時、家に百首の歌合し侍りけるに、忍戀の心を漏らすなよ雲井の嶺のはつ時雨木の葉は下に色かはるとも

水無瀬の戀の十五首の歌合に憂戀を

草深き夏野分けゆくさを鹿の音をこそたてね露ぞ零るる

水無瀬の戀の十五首の歌合に

山賤の麻の狭衣校を荒み逢はで月日やすぎふける庵

千五百番歌合に

歎かずよ今はたおなじ名取川瀬々の埋れ木朽ち果てぬとも

千五百番の歌合せに

身に添へるその面影も消えななむ夢なりけりと忘るばかりに

家に百首の歌合し侍りけるに、祈る戀といへる心を

幾夜われ波に萎れてきふね川袖に玉散る物思ふらむ

後朝戀の心を

またも來む秋をたのむの雁だにも啼きこそ歸る春の曙

水無瀬にて戀十五首の歌合に夕戀といへる心を

何故と思ひもいれぬ夕だに待ち出でしものを山の端の月

千五百番歌合に

廻り逢はむかぎりは何時と知らねども月な隔てそよその浮雲

我が涙もとめて袖に宿れ月さりとて人の影は見えねど

題しらす

思ひ出でて夜な夜な月に尋ねずば待てと契りし中や絶えなむ

八月十五夜、和歌所にて月前戀といふことを

邂逅に待ちつる宵も更けにけりさやは契りし山の端の月

百首の歌奉りしとき

朝臣と

朝臣と

言はざりき今來むまでの空の雲月日へだてて物思へとは

家に百首歌合し侍りけるに

思ひかね打ち寝る宵もありなまし吹きだに荒べ庭の松風

家の歌合に

いつも聞くものとや人の思ふらむ來ぬ夕暮れのまつ風の聲

近院右大臣

正二位源能有公、文徳帝御子

典侍藤原よるか朝臣、右のおほいまうち君すますなりにければ、かの昔おこせたりける文ども取り集めて返へすとて、たのめてし言の葉今はかへしてむ我が身ふるればおき所なし」とよみに送りける、かへし

今はとて返へす言の葉拾ひ置きておのが物から形見とやみむ

(古今)

小一條左大臣

従一位師尹公、藤原貞信公男、天曆二年權中納言左衛門督

五節の所にて、閑院の長姉君に遣しける

常磐なる日蔭の蔓今日しこそ心の色にふかく見えけれ

(後撰)

後三條内大臣

正二位公教公、八條藤原實行男

つれなかりける人の許に逢ふ由の夢を見てつかはしける

假寝に逢ふと見つるは現にて酷きを夢と思はましかば

(金葉)

後徳大寺左大臣

正二位實定公、大炊御門藤原公能公男

百首の歌よみ侍りける時、戀の歌とてよみ侍りける

人しれぬ木の葉の下の埋れ水おもふ心をかき流がさばや

(平家)

百首の歌よみ侍りける時、戀の心をよみ侍りける

さきに立つ涙とならば人知れず戀路に惑ふ道案内せよ

朝まだき露をさながら笹芽かる賤が袖だにかくは濡れじを

朝臣と

朝臣と

言はざりき今來むまでの空の雲月日へだてて物思へとは

家に百首歌合し侍りけるに

思ひかね打ち寝る宵もありなまし吹きだに荒べ庭の松風

家の歌合に

いつも聞くものとや人の思ふらむ來ぬ夕暮れのまつ風の聲

近院右大臣

正二位源能有公、文徳帝御子

典侍藤原よるか朝臣、右のおほいまうち君すますなりにければ、かの昔おこせたりける文ども取り集めて返へすとて、たのめてし言の葉今はかへしてむ我が身ふるればおき所なし」とよみに送りける、かへし

今はとて返へす言の葉拾ひ置きておのが物から形見とやみむ

(古今)

小一條左大臣

従一位師尹公、藤原貞信公男、天曆二年權中納言左衛門督

五節の所にて、閑院の長姉君に遣しける

常磐なる日蔭の蔓今日しこそ心の色にふかく見えけれ

(後撰)

後三條内大臣

正二位公教公、八條藤原實行男

つれなかりける人の許に逢ふ由の夢を見てつかはしける

假寝に逢ふと見つるは現にて酷きを夢と思はましかば

(金葉)

後徳大寺左大臣

正二位實定公、大炊御門藤原公能公男

百首の歌よみ侍りける時、戀の歌とてよみ侍りける

人しれぬ木の葉の下の埋れ水おもふ心をかき流がさばや

(平家)

百首の歌よみ侍りける時、戀の心をよみ侍りける

さきに立つ涙とならば人知れず戀路に惑ふ道案内せよ

朝まだき露をさながら笹芽かる賤が袖だにかくは濡れじを

朝臣と

朝臣と

引きかけて涙を人に慎む間に裏や朽ちなむ夜半の衣は
はかなくも來む世をかねて契るかなふたたび同じ身ともならじを

戀歌あまたよみ侍りけるに

かくとだに思ふ心をいはず山下ゆく水の草隠れつつ

〔新古今〕

語らひ侍りける女の、夢に見えて侍りければよみける

覺めて後夢なりけりと思ふにも逢ふは名残の惜しくやはあらぬ
憂き人の月はなにその由縁ぞと思ひながらも打ち眺めつつ

久我内大臣

正二位雅通公、中院源雅定男

戀ひしともいはぬに濡るる袂かな心を知るは涙なりけり

〔千載〕

寄枕戀といへる心をよみ侍りける

慎めども枕は戀を知りぬらむ涙かからぬ夜半しなければ

別れては形見なりける玉章を慰むばかり書きもおかせで

絶えて後の形見といへる心をよみ侍りける

頼むること侍りける女、煩ふこと侍りけるを怠りて、久我内大臣の許に、「頼め
こし言の葉ばかりとどめ置きて淺芽が露と消えなましかば」とつかはしけるに、
かへし

哀れにも誰れかは露と思はまし消え残るべきわが身ならねば

〔新古今〕

後久我太政大臣

従一位通光公、土御門源通親男

限りあればしのぶの山の麓にも落葉が上の露ぞいろづく

〔新古今〕

千五百番歌合に

千五百番歌合に

詠め侘びそれとはなしに物ぞ思ふ雲の際限の夕暮れの空
戀ひわぶる涙や空に曇るらむ光もかはる閨の月影

朝臣と

朝臣と

尋ねても袖にかくべきかたぞなき深き蓬の露の託言を

是

茂

從三位中納言、光孝帝御子、天慶四年薨五十七

なかきが女、心ざしおろかに見えける人につかはしけるとて、「またざりし歌は
來ぬれど見し人の心はよそになりもゆくかな」とありけるかへし
君を思ふ心ながさは秋の夜に何れまさると空にしらなむ

(後撰)

伊

房

正二位中納言、參議藤原行經男

君戀ふる身は大空にあらねども月日を多く過しつるかな

(千載)

伊

經

四位太皇太后宮亮、宮内少輔藤原伊行男、至建久九年

寄催馬樂戀といへる心をよめる

分け來つる小篋が露の繁ければあふ道にさへ濡るる袖かな

(千載)

是

則

五位加賀守、坂上好隆男、古今時御所預、延喜朱雀二代仕之

わが戀に暗部の山の櫻花まなく散るとも數はまさらじ

(古今)

逢ふことは長柄の橋の長らへて戀ひわたる間に年ぞ經にける

しるしなき思ひやなぞとあし鶴の音になくまでにあはず淋しき

(後撰)

海の底潜きて知らむ君がため君が心の深さくらべに

人の許より歸り詣て來て遣しける

逢ひ見ては慰さむやなぞ思ひしに名残りしもこそ戀しかりけれ

逢ひ見ては慰さむやとぞ思ひしを名残りしもこそ忘れ難けれ

(後撰)

平定文の家の歌合に

會の原や伏屋に生ふる帚木のありとは見えて逢はぬ君かな

(新古今)

朝臣と

朝臣と

小鹿伏す夏野の草の道をなみしけき戀路に惑ふころかな

あひて後逢ひ難き女に

霧ふかき秋の野中の忘れ水たえ間がちなる比にもあるかな
枕のみうくと思ひし涙川いまは我身の沈むなりけり

惟成

五位左中辨、世號五位攝政、左少辨藤原雅材男、至寛和二年

女のもとにつかはしける

人知れずつもる涙の積りつつ數かくばかりなりにけるかな

寛和二年内裏の歌合によめる

命あらば逢ふよもあらむ世の中になど死ぬばかり思ふ心ぞ

女につかはしける

風吹けば室の八島の夕煙心のそらに立ちにけるかな

(拾遺)

(同)

(同)

朝臣と

しばし待てまだ夜は深し長月の有明の月は人惑ふなり

或る人、藤原惟成に、「うちをへていや寝るる宮城野の小萩が下葉いろに出
でしより」とありければかへし

萩の葉や露のけしきも端的にもとよりかはる心あるものを

五節の頃、うちにて見侍りける人に、またの年つかはしける

小忌衣去年ばかりこそ馴れざらめけふの日蔭の懸けてだに問へ
人ならば思ふ心を言ひてましよしやさこそは賤の苧環

伊家

五位右中辨、周防守藤原公基男

承暦四年、内裏の歌合によめる

わが戀は夢路にのみぞ慰さむる強顔き人も逢ふと見つれば

(同)

伊綱

五位中務大輔、刑部大輔藤原家基男、永暦二年正月五日叙爵

朝臣と、さ
強顔くぞ夢にも見ゆる小夜衣うらみむとてや返へしやはせし

(千載)

是忠

五位、菅原

戀故はさもあらぬ人ぞ恨めしきわれよそならば問はましものを

(千載)

と

三條關白

從一位、太政大臣賴忠廉義公、藤原清慎公男

人の許にまかり初めて朝につかはしける

昨日まで逢ふにし代へばと思ひしを今日は命の惜しくもあるかな

(新古今)

三條右大臣

贈從一位定方公、内大臣藤原高藤公男、承平二年八月四日薨五十七

女の許につかはしける

名にし負はば逢阪山の眞蔓人に知られで來るよしもがな

(後撰)

消息遣しける女の許より、いな舟のといふ事を返事にいひ侍りければ、頼みて
いひ渡りけるに、猶逢ひ難き氣色に侍りければ、暫しとありしを、いかなればか
くはといへりける返事につかはしける、「流れよる瀬々の白浪淺ければとまるい
な舟かへるなるべし」とありければ、かへし

最上川深きにもあへずいな舟の心かろくも歸るなるかな

三條入道左大臣

正二位實房公、三條藤原公教公男

戀ひわぶる心は空に浮きぬれど涙の底に身は沈むかな

(千載)

西園寺入道前太政大臣

從一位太政大臣公經公、坊城藤原實宗男

戀ひ侘ぶる涙や空に曇るらむ光もかはる閨の月影
哀れなる心の闇の由縁とも見し夜の夢を誰れか定めむ

(新古今)

朝臣と、さ

朝臣 ぎ

千五百番歌合に

つくづくと思ひ明石の浦千鳥浪の枕になくなくぞ聞く

實家

正二位大納言、大炊御門右大臣藤原公能公男

よしさらば逢ふと見つるに慰さまむ覺むる現も夢ならぬかは

忍びて物申しに侍りける女の消息をだに通はしがたく侍りけるを、唐物の枕の下に師子つくりたるが、口の中に深く隠してつかはし侍りける

佗びつつは汝だに君が床馴れよ交さぬ夜半の枕なりとも

實國

正二位大納言、藤原

汐垂るる伊勢をの蟹やわれならむさらばみるめをかる由もがな

(千歌)

女の許につかはしける

戀ひ死なばわれゆるとだに思ひ出でよさこそは酷き心なりとも

定家

正二位中納言、三位藤原俊成男

爾ばかり契りし中も變りけるこの世に人を頼みけるかな

(千歌)

攝政太政大臣の家の百首の歌合に

靡かじな蟹の藻汐火焚きそめて煙は空に薰り佗ぶとも

(新古今)

海邊戀といふ事をよめる

須磨の海人の袖に吹き越す汐風のなるとはすれど手にも溜らず

冬戀

床の霜枕の氷消えわびぬ結びもおかぬ人の契りに

年も経ぬ人のちぎりは初瀬山尾上の鐘のよその夕暮れ

西行法師人々に百首の歌よませ侍りけるに

味氣なくつらき嵐の聲も憂しなど夕暮れに待ち慣ひけむ

歸へるさの物とや人の眺むらむ待つ夜ながらの有明の月

朝臣 ぎ

朝臣 さま
松山と契りし人は強顔くて袖こす波に残る月影

攝政太政大臣の家の百首の歌合に

忘れずば馴れし袖もや凍るらむ寝ぬ夜の床の霜の狭庭
消えわびぬ變ろふ人の秋の色に身をこがらしの森の下露
涸ぶとも知らじな心かはら屋にわれのみ消たぬ下の煙は
尋ねみる酷き心の意字の海よ汐干のかたのいふかひもなし

水無瀬戀十五首歌合に

白栲の袖の別れに露落ちて身に泌む色の秋風ぞ吹く
搔きやりしこの黒髪かみの筋ごとに打ちふす程は面影ぞたつ

信

明

四位陸奥守、右大辨源公忠男、康保二年十月八日卒

中務、男のもとに遣しけるとして「はかなくて同じ心になりしを思ふかことは

思ふらむやぞ」とありければ、かへし

佗びしさを同じ心ときくからに我身を捨てて君ぞ悲しき

久しうあはざりける女に遣しける

思ひきや逢ひみぬ事を何日よりと算ふばかりになさむものとは

中務、源信明頼む事なくば死ぬべしといへりければ「徒らにたびたび死
ぬといふめれば逢ふには何をかへむとすらむ」とありしかへし

死ぬ死ぬと聞く聞くだにも相見ねば命をいつの世にか残さむ

月あかりける夜、女のものにつかはしける

戀しさはおなじ心にあらずとも今宵の月を君見ざらめや

實

利

四位、從四位上橘春行男、至天祿三年

女のものに遣しける

酷しとも思ひぞ果てぬ涙川流れて人をたのむ心は

朝臣 さま

朝臣 實方

實

方

四位左中將、侍從藤原定時男、長徳四年十二月卒

懸想し侍りける女の更に返ごとし侍らざりければ

我がためは柵井の清水ぬるけれど猶かきやらむさてはすむやと

(拾遺)

忍びて物言ひ侍りける人の、人繁き處に侍りければ

人目をも慎まぬ物と思ひせば袖の涙のかからましやは

元輔が婿になりて朝に

時のまも心は空になるものをいかで過しし昔なるらむ

女を恨みて、更にまうで來じと誓ひて後に遣しける

何にせむ命を懸けて誓ひけむ行かばやと思ふ時もありけり

女に初めて遣しける

かくとだにえやは伊吹の差艾さしも知らじな燃ゆる思ひを

(後拾遺)

語らひ侍りける女の、異人に物言ふと聞きて遣しける

浦風に靡きにけりな里の蟹の焚く藻の煙こころ弱さは

清少納言人にしらせで絶えぬ中にて侍りけるに、久しう音づれ侍らざりければ

よそよそにて物など言ひ侍りけり、女さし寄りて忘れにけりなといひ侍りければよめる

忘れずにまた忘れずにかはら屋の下焚く烟したむせびつつ

いかでかは思ひありとも知らすべき室の八島の烟ならでは

(詞苑)

女の許より夜ふかく歸りて朝につかはしける

竹の葉に玉貫く露にあらねどもまだよを罩めておきにけるかな

契り來しことの違ふぞ頼もしき酷さもかくや變ると思へば

(千載)

女のもとより夜ふかく歸りて遣はしける

竹の葉に玉ぬく露にあらねどもまだよをこめておきにけるかな

女につかはしける

いかにせむ久米路の橋の中空に渡しも果てぬ身とやなりなむ

(新古今)

朝臣 實方

朝臣 實方

實

方

四位左中將、侍從藤原定時男、長徳四年十二月卒

懸想し侍りける女の更に返ごとし侍らざりければ

我がためは柵井の清水ぬるけれど猶かきやらむさてはすむやと

(拾遺)

忍びて物言ひ侍りける人の、人繁き處に侍りければ

人目をも慎まぬ物と思ひせば袖の涙のかからましやは

元輔が婿になりて朝に

時のまも心は空になるものをいかで過しし昔なるらむ

女を恨みて、更にまうで來じと誓ひて後に遣しける

何にせむ命を懸けて誓ひけむ行かばやと思ふ時もありけり

女に初めて遣しける

かくとだにえやは伊吹の差艾さしも知らじな燃ゆる思ひを

(後拾遺)

語らひ侍りける女の、異人に物言ふと聞きて遣しける

浦風に靡きにけりな里の蟹の焚く藻の煙こころ弱さは

清少納言人にしらせで絶えぬ中にて侍りけるに、久しう音づれ侍らざりければ

よそよそにて物など言ひ侍りけり、女さし寄りて忘れにけりなといひ侍りければよめる

忘れずにまた忘れずにかはら屋の下焚く烟したむせびつつ

いかでかは思ひありとも知らすべき室の八島の烟ならでは

(詞苑)

女の許より夜ふかく歸りて朝につかはしける

竹の葉に玉貫く露にあらねどもまだよを罩めておきにけるかな

契り來しことの違ふぞ頼もしき酷さもかくや變ると思へば

(千載)

女のもとより夜ふかく歸りて遣はしける

竹の葉に玉ぬく露にあらねどもまだよをこめておきにけるかな

女につかはしける

いかにせむ久米路の橋の中空に渡しも果てぬ身とやなりなむ

(新古今)

朝臣 實方

朝臣 ぎ

女の杉の實を包みておこせ侍りければ

誰れぞこのみ輪の檜原もしらなくに心のすぎのわれを尋ぬる
なかなかに物思ひそめて寝る夜は夢もえやはみえける
明け難きふたみの浦に寄る浪の袖のみ濡れて沖津島人

前載の露おきたるを、などか見すなりにしと申しける女に

おきて見れば袖のみ濡れて最しく草葉の玉の數や増さらむ

早う物申しける女に、枯れたる葵を御生の日つかはしける

古のあふひと人は咎むとも猶その昔の今日ぞ忘れぬ

貞

文

イ定文、五位左兵衛佐、左少將平好風男、平仲也

白川のしらすともいはじ底清み流れて夜々にすまむと思へば
枕よりまた知る人もなき戀を涙塞き散へず洩らしつるかな

（後撰）

秋風の吹き裏返へす葛の葉のうらみてもなほ恨めしきかな

紀の乳人、逢ひ侍りける人の久しう消息なかりければ影だにも見えすなり

ゆく山の井は浅きよりまた水や絶えにし」とつかはしければ、かへし

浅してふことを由々し山井は堀りし濁りに影は見えぬぞ

（後撰）

土佐、平定文が許より難波の方へなむまかるといひておくりて侍りければ「浦
わかす海松布刈るてふ蟹の身はなにか難波の方へしもゆく」とありけるかへし

君を思ふ深さくらべに津の國の堀江見に行く我れにやはあらぬ

われのみや燃えて消えなむ世と共に思ひもあらぬ富士の嶺のごと

人をいひ煩ひて遣しける

何事を今はたのまむ千早振る神も救けぬ我身なりけり

人を思ひ懸けて遣しける

濱千鳥頼むを知れとふみ初むる跡打ち消つなわれを越す浪

朝臣 ぎ

朝臣 ぎ

大納言國經朝臣の家に侍りける女に、平定文いと忍びて語らひ侍りて行末まで契り侍りける頃、この女俄かに贈太政大臣に迎へられて渡り侍りにければ、文だに通はす方なくなりにつければ、かの女の子の五つばかりなるが本院の西の對に遊びありきけるを呼び寄せて、母に見せ奉れとて腕かたに書きつけ侍りける
昔せしわが豫言かねごとの悲しきはいかに契りし名残りなるらむ

稻荷に詣で、逢ひて侍りける女の物言ひかけ侍りけれど、答へもし侍らざるけりば

稻荷山社いなかりやまじらの數を人間はば強顔つねなき人をみつと答へむ

(拾遺)

宮仕しける女を語らひ侍りけるに、やむことなき男の入り立ちていふ氣色を見て恨みけるを、女あらがひければよみ侍りける

偽りを糾たづの森の木綿襪ふわたきかけつつ誓へわれを思はば

(新古今)

貞樹サダキ

五位肥後守、小野石見王御子、至貞觀

朝臣 ぎ

小野小町、「今はとて我身時雨にふりぬれば言の葉さへに移ろひにけり」とありけるかへし

人を思ふ心木の葉はにあらばこそ風のまにまに散りも亂れめ

(古今)

定季サダメ

五位右少將、參議源賴定男、至長曆

今日よりは疾はやくくれ竹のふし毎ごとによは長かれと思ほゆるかな

(後拾遺)

實重サネ

五位、宮内大輔平昌隆男、至久安六年

戀ひ死なむ身こそ思へば惜しからね憂うれきも辛つらきも人の科かかは

(國花)

左京大夫顯輔が家に歌合し侍りけるによめる
女の通ふ人あまた聞ゆるに遣しける

淺ましやさのみはいかに信濃なる木曾路きそぢの橋のかけ渡るらむ
人の上と思はばいかに抵拵もぢかまし醋つらきも知らず戀ふる心を

(千載)

朝臣 ぎ、し

定^{サダ} 雅^{マサ}

六位、尾張守大中臣雅光男

わが床は信夫の奥の眞菅原露かかるとも知る人のなき

(平歌)

し

重^{シゲ} 光^{ミツ}

正二位大納言、源代明親王男

女の許より歸へりて朝つかはしける

歸りけむ空もしられず姥捨の山より出でし月を見しまに

(後撰)

物言ひける女に、蟬のもぬけを包みてつかはすとて

これを見よ人も遊めぬ戀すとて音をなく蟲のなれる姿を

重^{シゲ} 家^{イヘ}

從二位、左京大夫藤原顯輔男

戀ひ死なむことぞ果敢なき渡り川逢瀬ありとは聞かぬものゆる

(平歌)

後の世を歎く涙といひなして絞りやせまし墨染の袖

(新古今)

入道前關白右大臣に侍りける時、百首の歌人によませ侍りけるに忍戀の心を

重^{シゲ} 保^{ヤス}

四位、神主賀茂重繼男、至治承元年

戀の百首の歌よみ侍りける時、寄霞戀といへる心をよめる

情もなき人の心や逢坂のせき路隔つる霞なるらむ

(平歌)

夏に入りて戀まさるといへる心をよめる

人知れず思ふ心は深見草花咲きてこそ色に出でけり

錦木の千束に限りなかりせば猶戀りすまに立てましものを

重^{シゲ} 政^{マサ}

四位、神主賀茂重保男、至承久三年

遠きさかひを待つ戀といへる心を

頼めても遙けかるべきかへる山幾重の雲の下に待つらむ

(新古今)

朝臣 し

朝臣し

滋

轉

五位左少將、大納言藤原國經男、延長六年右少將、承平元年卒

東宮に鳴門といふ戸のもとに、女と物言ひけるに、親の戸をさして率て入りに
ければ、又のあしたに遣しける

鳴戸より差出されし舟よりもわれぞ寄邊もなき心地せし

(後撰)

宵に女にあひて、必ず後にあはむと誓言を立てさせて、あしたに遣しける

千早振る神引きかけて誓ひてしことも由々しく抵抗ふな努

重

之

五位左馬助、五位源兼信男

染河に宿かる浪の早ければなき名立つとも今は恨みじ

(拾遺)

戀しきを慰めかねて菅原や伏見に來ても寝られざりけり

淀野へと御秣草蒨りに行く人も暮れにはただに歸るものかは

(後拾遺)

松島や小島の磯に漁りせし蟹の袖こそかくは濡れしか

冷泉院、春宮と申しける時、百首の歌奉りけるに詠める

風を甚み岩打つ波のおのれのみ碎けて物を思ふ比かな

(詞花)

筑波山端山繁山しけけれど思ひ入るには障らざりけり

(新古今)

百首の歌の中に

霜の上に今朝降る雪の寒むければ重ねて人を酷しとぞ思ふ

山城の淀の若菰蒨りに來て袖濡れぬとは託たざらなむ

陸奥の安達に侍りける女に、九月ばかりにつかはしける

思ひやるよそのむら雲時雨れつつ安達の原に紅葉しぬらむ

順

五位能登守、左馬允源舉男、至天正三年

戀しきを何につけてか慰めむ夢だにみえず寝る夜なければ

(拾遺)

女の許より暗きにかへりて遣しける

朝臣し

朝臣し

明け暮れの空にぞわれは迷ひぬる思ふ心の往かぬまにまに

萬葉集和し侍りけるに

思ふらむ心のうちを知らぬ身は死ぬばかりにもあらじとぞ思ふ

萬葉集和せる歌

獨り寝る宿には月の見えざらば戀しきことの數はまさらじ

萬葉集和し侍りける歌

涙川底の藻屑となり果てて戀しき瀬々に流れこそすれ

うきしま

さだめなき人の心にくらぶればただ浮島は名のみなりけり

重

基

五前中務少輔、近江守藤原有佐男、至天承元年

逢ふことをその年月と契らねば命や戀のかぎりなるらむ

(千載)

重

延

五位、賀茂

いつしかと袖に時雨の灑ぐかな思ひは冬のはじめならねど

す

(千載)

資

仲

從二位中納言、大納言藤原資平男

伊賀少將が許へ遣しける

四方の海の浦々毎に漁れども奇しくみえぬ生けるかひかな

(金葉)

輔

親

從二位、祭主大中臣能宣男

八月ばかり、女のもとに薄の穂にさして遣しける

篠薄忍びもあへぬ心にて今日は穂にいづる秋と知らなむ

(後拾遺)

文つかはしける女の返事せざりければ詠める

朝臣し、す

朝臣す

滿つ汐しほの干ひるまだになき浦なれや通ふ千鳥の跡も見えねば

女に逢ひて又の日遣しける

程もなく戀ふる心は何なれや知らでだにこそ年は經にししか

源遠古が娘に物いひ渡り侍りけるに、彼がもとにありける女を、又仕人つかひびと、あひ

棲み侍りけり、伊勢の國に下りて都戀しうおぼえけるに、仕人つかひびとも同じ心によ思

ふらむとおしはかりて詠める

わが思ふ都の花の木梢とぎさゆる君も末枝しうえの靜心しづこころあらじ

今はとも思ひな絶えそ野中なる水の流れは行きてたづねむ

(新古今)

季 經フネ

正三位、左京大夫藤原顯輔男

攝政右大臣の時、家の歌合に戀の歌とてよめる

思ひ出づるその慰めもありなまし逢ひ見て後のつらさ思へば

(千載)

季 能ヨシ

正三位、太皇太后宮大夫藤原俊盛男

強顔つれなさにいはで絶えなむと思ふこそあひ見ぬ先の別わかれなりけれ

(千載)

季 行ユキ

從三位、刑部卿藤原敦忠男

忍びて物いひ侍りける女の、常に志なしと怨じければつかはしける

君にのみ下したの思ひは川島の水の心は淺からなくに

(千載)

俊スゲル

四位近江守、右大辨源唱男、至天曆元年

年經ていひ渡り侍りける女に

久しくも戀ひわたるかな住の江の岸に年ふる松ならなくに

(後撰)

季 通ミチ

四位備後守、大納言藤原宗通男、至久安四年

朝臣す

朝臣す

歎きあまり憂き身ぞ今はなつかしき君故物を想ふと思へば
今はただ押ふる袖も朽ち果てて心のままに落つる涙か

(千載)

輔

文

五位、藤原

女の曹子まうしに夜々よるよる立ちつゝ物などいひて後

阿武隈あぶくまの霧とはなしに夜もすがら立ち渡りつつ世をもふるかな

(後撰)

祐

舉

五位駿河守、越前守平保衡男、至長和四年

胸は富士袖は清見きよみが關せきなれや烟も浪もたたぬ日ぞなき

(詞花)

輔

昭

五位大内記、從三位菅原文時男、天元五年出家

契りけることありける女につかはしける

露ばかり頼めしことの過ぎゆけば消えぬばかりの心地こそすれ

(拾遺)

輔

弘

五位神祇權大副、神祇大副大中臣輔宗男、康和五年
八月十三日配流佐渡國

忘れじと契りたる女の、久しう逢ひ侍らざりければ遣しける

つらしとも思ひしらでぞやみなましわれも果なき心なりせば

(後拾遺)

季

通

五位駿河守、陸奥守橘則光男、至康平三年

閏五月侍りける年、人を語らひけるが、後の五月過ぎてなど申しければよめる

なごもかく戀路にたちて菖蒲草あやめぐさあまり長びく五月さつきなるらむ

(金葉)

相

如

五位出雲守、右中將藤原相信男、(イ内藏頭助俊男、)至永祿元年

人静まりて來こといひたる女の許へ、侍ち兼ねてとく罷りたりければ、かくやは
言ひつるとて出逢はず侍りければ言ひ入れ侍りける

朝臣す

朝臣 ず、た

君をわが思ふ心は大原やいつしかとのみ炭焼かれつつ

(詞花)

季 貞 五位、源

人知れず思ひそめてし心こそいまは涙の色となりけれ

(千歌)

た

忠 家 正二位大納言、大納言藤原長家男

いかばかり嬉しからまし面影に見ゆるばかりの逢ふ夜なりせば

(後拾遺)

忠 教 正二位大納言、京極關白藤原師實男

戀ひわびて絶えぬ思ひの煙もやむなしき空の雲となるらむ

(金葉)

戀の心をよめる

隆 房 正二位大納言、大納言藤原隆季男

おなじくは重ねて絞れ濡れ衣さても干すべきなき名ならじを

(千歌)

女に忍びて語らふこと侍りけるを、聞ゆることの侍りければつかはしける

何處より吹きくる風の散らしけむ誰れを信夫の森の言の葉

戀ひ死なば浮かれむ魂よしばしだに我か思ふ人のつまにとどまれ

前大納言隆房、中將に侍りける時、右近馬場の引折の日漕れりけるに、物見

侍りける女車よりつかはしける「ためしあれば眺めはそれと知りながら覺束な

きは心なりけり」とありければ、かへし

言はぬより心や行きて案内する眺むる方を人の問ふまで

(新古今)

忠 良 正二位大納言、六條攝政藤原基實公男

朝臣 た

朝臣 た

契る事侍りけるを忘れたる女につかはしける

何とかや忍ぶにはあらで故郷の軒端にしける草の名ぞ憂き

(千巻)

あけぐれの空を共に眺めせる女、又逢ふまでの形見に見むと申しける後つかはしける

忘れぬや忍ぶやいかに逢はぬ間の形見とききし明暮れの空

これは皆想ひしことぞ馴れしより哀れ名残をいかにせむとは

思ひ出でよ夕べの雲も懸懸かばこれや歎きに耐へぬ煙と

五十首の歌奉りし時

たのめおきし浅茅が露に秋掛けて木の葉ふり敷く宿の通ひ路

(新古今)

忠信 正二位大納言

女の深き山にも入らまほしき由いひて侍りければつかはしける

山よりも深きところを尋ね見ば我心にぞ人は入るべき

(千巻)

篁

從三位參議、參議小野峯守男

打解けて寝ぬもの故に夢を見て物思ひまさる比にもあるかな

(新古今)

忍びて語らひける女の、親ききて諫め侍りければ

數ならばかからましやは世の中にいと哀しきは賤の苧環

隆綱 正二位參議、大納言源隆國男

人につかはしける

歸るべき程を算へて待つ人は過ぐる月日ぞ嬉しかりける

(後拾遺)

爲通 正四位下參議、大宮相國藤原伊通男

契りける事違ひにける女につかはしける

契りしも諸共にこそ契りしか忘れればわれも忘れましかは

(千巻)

朝臣 た

朝臣 た

忠 定

從二位參議、大納言藤原兼宗男

欲言出戀といへる心を

思へどもいはで月日はすぎの門さすがにいかが忍び果つべき

(新古今)

高 遠

正二位、參議藤原齊敏男

大貳高遠物いひ待りける女の家の傍に、また忍びて物言ふ女の家侍りけり、門の前より忍び渡り待りけるを、いかで聞きけむ女の許より遣しける、「過ぎてゆく月をも何にうらむべき待つわが身こそ哀れなりけれ」とありしはか、かへし杉立てる門ならませば訪ひてまし心のまつはいかがしるべき

(後拾遺)

はじめて女につかはしける

水籠りの沼の岩垣慎めどもいかなるひまに濡るる袂ぞ

(新古今)

忠 房

四位左京大夫、藤原興嗣朝臣男、延喜十一年左少將

虚偽の涙なりせば唐衣忍びに袖は絞らざらまし

(古今)

女の許にはじめて遣しける

人を見て想ふおもひもあるものを空に戀ふるぞ果敢なかりける
隠れ沼に忍び侘びぬる我身かな井出の蛙となりやしなまし

(後撰)

大和の守に待りける時、かの國の介藤原清香が女を迎へむと契りて、公けごとによりてあからさまに京に上りたりける程に、この女、眞延法師に迎へられまかりにければ、國に歸へりてたづねて遣しける

いつしかのねに泣き歸り來しかども野邊の淺茅は色づきにけり

消息遣しける女の返事に、まめやかにしもあらじなどいひて待りければ
引き蘭のかく二籠りせまほしき桑扱き垂れて泣くを見せばや

女五のみに

君が名の立つに科なき身なりせば大凡人になしてみましや

女の許に遣しける

朝臣 た

朝臣 女

君が名の立つにとがなき身なりせば大凡人になして見ましや
石の上古りにし戀の神進びて崇るにわれは祈ぎぞ兼ねつる

(後拾遺)

隆

經

四位美濃守、左中辨藤原賴經男、至延久三年

女の許に遣しける

いかにせむあなあや憎くの春の日や夜半の景色のかからましかば

(後拾遺)

隆

方

四位、備中守藤原隆光男、承暦二年十二月卒

平行親朝臣の娘の許にまかり初めて又のあしたによめる

暮るる間は千歳を過ぐる心地して待つはまことに久しかりけり

(後拾遺)

忠

盛

四位刑部卿、讃岐守平正盛男、至仁平元年

一方に靡く藻汐の煙かな強顔き人のかからましかば

(千載)

爲

忠

四位、皇后宮少進藤原知信男、至保延元年

寄三日月戀をよめる

宵のまに仄かに人をみか月の飽かて入りにし影ぞ戀しき

(金葉)

隆

信

四位、長門守藤原爲經男、至壽永二年

われ故の涙とこれをよそに見ば哀れなるべき袖の上かな

(千載)

君やそれありしつらさは誰れなれば怨みけるさへ今は悔しき

絶久戀といへる心を詠み侍りける

人しれず結びそめてし若草の花の盛りも過ぎやしぬらむ

忠

行

五位若狹守、遠江守藤原有貞男、至延喜六年

君といへば見まれ見すまれ富士の嶺の珍らしけなく燃ゆるわが戀

(古今)

朝臣 女

朝臣 女

忠 國

五位、伊豫介藤原連永男

忍びあひわたりける人に

漁火の夜はほのかに隠しつつありへば戀の下に消ぬべし

(後撰)

爲 世

五位兵庫介、散位藤原忠相男、至天慶九年

得難う侍りける女の家の前よりまかりけるを見て、何處へ行くぞといひ出して侍りければ

逢ふことを交野へとてぞわれは行く身を同じ名に思ひなしつつ

(後撰)

高 光

五位左少將法名如覺、號多武峯上人、九條右大臣藤原師輔男、至寛和元年

人の文つかはして侍りける返事に添へて女につかはしける

年を経て思ふ心のしるしにぞ空もたよりの風ぞ吹きぬる

(新古今)

秋風に亂れて物は思へども萩の下葉の色はかはらず

爲 基

五位、攝津守、參議大江齋光男、至永祚元年

女の許にまかりそめて

日のうちに物をふたたび思ふかな疾く明けぬると遅く暮るると

(拾遺)

物いひ侍りける女のもとへいひつかはしける

思ふことなくて過ぎぬる世の中についに心をとどめぬるかな

(詞花)

忠 依

五位準人正、右中辨平希世男、至天延二年

女のもとにつかはしける

逢ふ事は心にもあらで程經ともさやは契りし忘れ果てねど

(拾遺)

爲 時

五位、刑部大輔藤原惟正男、至天元二年

文通はす女のこと、方襟になりぬと聞きてつかはしける

朝臣 女

朝臣 た

いかにせむ懸けても今は頼まじと思ふにいとど濡るる袂を

隆タカ 資スネ 五位武藏守、(イ隆賢)藤原頼政子(イ安隆子)至永保三年

七夕の後朝に女の許に遣しける

逢ふことのいつとなきには織女の別るるさへぞ羨やまれける

忠タメ 隆タカ 五位齋宮寮頭、刑部少輔藤原基忠男、至保延六年

長實卿の家の歌合に戀の心を詠める

慎めども涙の雨のしければ戀する名をも降らしつるかな
押ふれどあまる涙は守山のなげきに落つる雫なりけり

爲タメ 眞マコト 五位肥後守、信濃守藤原永實男

蘆の屋の假初臥しは津の國の長柄へ行けど忘れざりけり

隆タカ 親チカ 五位河内守、左兵衛佐源隆教男、自永萬元年至壽永二年

壓はるる身を憂しとてや心さへ我を離れて君に添ふらむ
思ひしる心のなきを歎かな憂き身故こそ人も酷けれ

忠タメ 岑ミネ 六位、右衛門府生、散位壬生安綱男

春日の祭に招かれりける時に、物見に出でたりける女の許に家を尋れて遣せりける

春日野の雪間を分けて生ひいづる草の纒かに見えし君はも
搔暗し降る白雪の下消えに消えて物思ふころにもあるかな
秋風に搔き鳴す琴の聲にさへはかなく人の戀しかるらむ
滾つ瀬に根ざしとどめぬ浮草のうきたる戀も我はするかな
風吹けば峯に分るる白雲の絶えて強顔き君が心か

朝臣 た

朝臣 た

いかにせむ懸けても今は頼まじと思ふにいとど濡るる袂を

隆タカ 資スネ 五位武藏守、(イ隆賢)藤原頼政子(イ安隆子)至永保三年

七夕の後朝に女の許に遣しける

逢ふことのいつとなきには織女の別るるさへぞ羨やまれける

忠タメ 隆タカ 五位齋宮寮頭、刑部少輔藤原基忠男、至保延六年

長實卿の家の歌合に戀の心を詠める

慎めども涙の雨のしければ戀する名をも降らしつるかな
押ふれどあまる涙は守山のなげきに落つる雫なりけり

爲タメ 眞マコト 五位肥後守、信濃守藤原永實男

蘆の屋の假初臥しは津の國の長柄へ行けど忘れざりけり

隆タカ 親チカ 五位河内守、左兵衛佐源隆教男、自永萬元年至壽永二年

壓はるる身を憂しとてや心さへ我を離れて君に添ふらむ
思ひしる心のなきを歎かな憂き身故こそ人も酷けれ

忠タメ 岑ミネ 六位、右衛門府生、散位壬生安綱男

春日の祭に招かれりける時に、物見に出でたりける女の許に家を尋れて遣せりける

春日野の雪間を分けて生ひいづる草の纒かに見えし君はも
搔暗し降る白雪の下消えに消えて物思ふころにもあるかな
秋風に搔き鳴す琴の聲にさへはかなく人の戀しかるらむ
滾つ瀬に根ざしとどめぬ浮草のうきたる戀も我はするかな
風吹けば峯に分るる白雲の絶えて強顔き君が心か

朝臣 た

朝臣 た

月影に我身を代ふるものならば強顔き人も哀れとや見む
命にも勝りて惜しくあるものは見果てぬ夢の覺むるなりけり
有明のつれなく見えし別れより曉ばかり憂きものはなし
陸奥むつにありといふなる名取川なとりがはなき名とりては苦しかりけり
一人のみ思ふは苦しいかにして同じ心に人を教へむ

あひ知りて侍りける人を、久しう訪はずしてまかりたりければ門より返し遣しけるに

(拾遺)

住の江のまつに立ち寄る白浪のかへる折にや音は泣かるらむ
思ふてふ事をぞ妬ねたく舊ふるしける君にのみこそ言ふべかりけれ

つれなく侍りける人に

戀ひ侘びて死ぬてふことはまだなきを世の例たとにもなりぬべきかな
月影を我身に代ふるものならば想はぬ人も哀れとや見む

(拾遺)

忠臣

六位、菅野、大系圖考菅原清公三男也、菅聖胤伯父也、歌人、入今云々

寛平の御時、后の宮の歌合の歌

強顔つねなきを今は戀ひじと思へども心弱くも落つる涙か

(古今)

忠見

六位攝津守、右衛門尉壬生忠岑男

天曆の御時の歌合

戀すてふ我名は夙またき立ちにけり人知れずこそ思ひ初めしか

(拾遺)

同じく

夢のごとなどか夜よるしも君を見む暮るる待つ間も定めなき世に

ち

親隆

正三位參議、大藏卿藤原爲房男

朝臣 た、ち

朝臣 ち

關白前太政大臣の家にて詠める

風吹けば藻汐の煙片寄りに靡くを人の心ともがな

(詞花)

百首の歌奉りける時戀の歌とてよめる

陸奥の十綱の橋に繰る綱の絶えずも人にいひ渡るかな

(千歌)

同じく

潮垂るる伊勢をの蚤の袖だにも干すなる隙はありとこそ聞け

東屋の小萱の軒の忍草しのびも敢へず繁る思ひに

知るなればいかに枕の思ふらむ塵のみ積る床の景色を

千 兼 五位肥前守、左京大夫藤原忠房男、至康保二年

流れては行く方もなし涙川我身のうらや限りなるらむ

(後撰)

千 古 五位伊豫守、參議大江音人丸男、延喜二年五月廿九日卒

思ひやる心に比ふ身なりせば一日に千度君は見てまし

(後撰)

親 房 五位遠江守、淡路守源仲房男、至久安二年

忍戀の心をよめる

物をこそ忍べはいはぬ岩代のもりにのみ漏る我涙かな

(金葉)

親 盛 五位大和守、文章生藤原説弘男、至建久三年

思ひ堰く心のうちの柵も堪へずなりゆく涙河かな

(千歌)

千 里 六位兵部大丞、參議大江音人男、延喜三年任兵部大丞

音に泣きて沾ぢにしかども春雨に濡れにし袖と問はば答へむ

(古今)

今朝はしも起きけむ方も知らざりつ思ひ出づるぞ消えて悲しき

朝臣 ち

土御門内大臣

正二位通親公、久我源雅通公男

法性寺殿の殿上の歌合に臨期違約戀といへる心を詠める

いま暫し空頼めにも慰めで思ひ絶えぬる宵の玉章

(千載)

忍びたる處にまかりて、有明の月に夜ふかく歸りて遣しける

思へただ入りやらざりし有明の月よりさきに出でし心を

死ぬとても心を分くるものならば君に残してなほや戀ひまし

九月つごもりに女につかはしける

世にしらぬ秋の別れに打ち添へて人爲りならず物ぞ悲しき

建仁元年三月、歌合に逢不遇戀の心を

相見しは昔語りの現にてその豫言を夢になせとや

(新古今)

經 信

正二位大納言、中納言源通方男

あづまに侍りける人に遣しける

東路の旅の空をぞ思ひやる其方に出づる月を眺めて

(後拾遺)

小辨が許につかはしける

君がため落つる涙の玉ならば貫きかけて見せましもものを

蘆垣の隙なくかかる蜘蛛の綱の物むつかしく繁るわが戀

(金葉)

女の許へつかはしける

あふ事はいつともなくて哀れわが知らぬ命に年を経るかな

雪の朝に出羽辨がもとより歸りけるに、彼より送りて侍りける、おくりては歸

れと思ひし魂の行きさすらひて今朝はなきかなとありしかへし

冬の夜の雪消の空に出でしかど影より外に送りやはせし

經 輔

正二位大納言、權中納言藤原隆家男

朝臣 っ

志し侍りける女の、ことさまになりて後石山に籠りあひて侍りければよみ侍りける

戀しさも忘れやはするなかなかこころさばがに心騒しす志賀しがの浦波

(後拾遺)

經

房

正二位大納言、右中辨藤原光房男

石清水いししみづの歌合とて人々よみ侍りける時、寄松戀といへる心をよみ侍りける

儂はかなしな心つくしに年を経ていつとも知らぬ阿武あぶの松原

(千載)

移香うつりか増戀といへる心をよみ侍りける

移香うつりかになに泌しみみにけむ小夜衣よこころも忘れぬつまとなりけるものを

經

忠

正二位中納言、藤原師信朝臣男

逢不遇戀といへる事をよめる

一夜ひとよとはいつか契りし河竹かはたけの流れてとこそ思ひそめしか

(金葉)

皇后宮にて山里戀といへる事をよめる

山里やまざとの思おもひけ覚さに氷柱つららゐて解とくろ心の難かたけなるかな

なき名たつといへる事を詠める

人知れぬなき名は立てど唐衣重たからねぬ袖はなほぞ露つゆけき

經

家

正三位、刑部卿藤原重家男

戀の歌とてよめる

契ちぎりしにあらす鳴戸なるとの濱はま千鳥跡ちどりだにみせぬうらみをぞする

(千載)

隔河忍戀かきせをいふ事を

忍しのびあまり天あまの河瀬かはせに言寄ことよせむせめては秋を忘れだにすな

(新古今)

經

章

四位東宮亮、伊豫守平範國男、至延久二年

はじめたる女につかはしける

朝臣 っ

朝臣 っ

霜枯の冬野にたてるむら薄ほのめかさばや思ふ心を

(後拾遺)

經 基

五位上野介(イ正四位上鎮守府將軍兵部少輔)貞純親王御子
天慶八年五月十五日叙正五位下、天德二年十一月卒四十五

哀れとも君だにいはば戀ひ侘びて死なむ命も惜しからなくに

(拾遺)

遠き處に思ふ人をおき侍りて

雲井なる人を遙かに思ふには我が心さへ空にこそなれ

貫 之

五位木工權頭、紀望行男、天慶八年三月任木工頭、天慶九年卒

吉野川いは波高くゆく水のはやくぞ人を思ひ初めてし

(古今)

世の中はかくこそありけれ吹く風の目に見ぬ人も戀しかりけり

人の花摘みしける處にまかりて、そなる人のもとに後によみてつかはしける

山櫻霞のまより仄かにも見てし人こそ戀しかりけれ

逢ふ事は雲井遙かに鳴神の音にききつつ戀ひ渡るかな

朝臣 っ

君戀ふる涙しなくば唐衣胸のあたりは色燃えなまし

世とともに流れてぞ行く涙川冬も凍らぬ水泡なりけり

夢路にも露やおくらむ夜もすがら通へる袖の沾ちて乾かぬ

五月山梢を高め時鳥鳴く音空なる戀もするかな

秋の野に亂れて咲ける花の色の千種に物を思ふころかな

眞菰荳る淀の澤水雨ふれば常よりことに増さるわが戀

大和に侍りける人に遣しける

越えぬまは吉野の山の櫻花人傳てにのみききわたるかな

彌生計りに物の賜びける人の許に、又人罷りて消息すと聞きてよみて遣しける

露ならぬ心を花におき初めて風吹くごとに物思ひぞ付く

我が戀は知らぬ山路にあらなくに惑ふ心ぞ侘びしかりける

紅のふり出つつ泣く涙には袂のみこそ色まさりけれ

朝臣 づ

白玉と見えし涙も年経れば唐紅に移ろひにけり
 津の國の難波の蘆の目も遙に繁きわが戀人知るらめや
 手も觸れで月日經にける白眞弓起き伏し夜はいこそ寢られぬ
 人知れぬ思ひのみこそ佗びしけれわが歎きをば我のみぞ知る
 忍ぶれど戀しき時は足引の山より月のいでてこそ來れ
 石の上布留のなか道なかなに見ずば戀しと思はましやは
 敷島の大和にはあらぬ唐衣ころも經ずして逢ふ由もがな
 色もなき心を人に染めしより移ろはむとは思ほへなくに
 古に猶たちかへる心かな戀しきことに物忘れせで
 初雁の鳴きこそわたれ世の中の人の心の秋し憂ければ
 忍びたりける人に物語し侍りけるを、人の騒がしく侍りければ罷りて遣しける
 曉となにかいひけむ別るれば宵もいとこそ佗しかりけれ

後撰

朝臣 づ

源おほきが通ひ侍りけるを、後々は罷らすなり侍りければ、隣の壁の穴よりお
 ほきをばつかに見て遣しける
 徵睡まぬ壁にも人を見つるかな正しからなむ春の夜の夢
 ある處に近江といひける人のもとに遣しける
 汐満たぬ海ときけばやよとともにもみるめなくして年の經ぬらむ
 言ひかはしける女の許より、なほざりにいふにこそあらめといへりければ
 色ならばうつるばかりも染めてまし思ふ心をえやは見せける
 知る人のなきイ
 住の江の波にはあらねど夜とともに君に心を寄せ渡るかな
 涙にも思ひの消ゆるものならばいとかく胸は焦さざらまし
 年久しく通はし侍りける人に遣しける
 玉の緒の絶えて短かき命もて年月長き戀もするかな
 心させる女の家のあたりに罷りて言ひ入れ侍りける

朝臣 づ

侘びわたるわが身は露とおなじくは君が垣根の草に消えなむ

女の許にまかりたりけるを、ただにて歸し侍りければいひ入れ侍りける

恨みても身こそつられ唐衣きて徒らにかへると思へば

はつかに人を見て遣しける

便りにもあらぬ思ひの奇しきは心を人に付くるなりけり

宮仕する女の逢ひ難く侍りけるに

手向せぬ別れする身の侘びしきは人目をたびと思ふなりけり

いかでわれ人にも問はむ曉の飽かぬ別れや何に似たりと

別れつる程もへなく白浪の立ちかへりては見まくほしきに

止むことなきことによりて、遠き處にまかりて立たむ月ばかりになむまかり歸

るべきと云ひて罷り下りて、道よりつかはしける

月改へて君をば見むといひしかど日だに隔てず戀しきものを

人の許より歸りてつかはしける

曉のなからましかば白露のおきて侘びしき別れせましや

人の女の許に忍びつつ通ひけるを、親聞きつけていといたくいひければ歸りて

つかはしける

風を甚みくゆる煙の立ち出でても猶こりすまの浦ぞ戀しき

色ならばうつるばかりを染めてまし思ふ心を知る人のなき

拾遺

朝な朝な梳れば積る落ち髪の亂れて物を思ふころかな

行末はついに過ぎつつ逢ふことの年月なきぞ侘びしかりける

曉のなからましかば白露のおきて侘びしき別れせましや

逢ひみてもなほ慰さまぬ心かな幾千代寝てか戀の醒むべき

百羽搔翼搔く鳴もわが如くあした侘びしき数は勝らじ

源公忠朝臣日々にまかり合ひ侍りけるを、いかなる日にかありけむ逢ひ侍らざ

朝臣 づ

朝臣 っ

りける日つかはしける

玉鉾の遠道もこそ人は行けなど時の間も見ねば戀しき
照る月も影水底に映りけり似たる物なき戀もするかな

延喜十五年、屏風の歌

忘らるる時しなければ春の日をかへすがへすも人は戀しき
色もなき心を人に染めしより移ろはむとはわが思はなくに
涙川落つる水上早やければ堰きぞかねつる袖の柵
浮りける節をば捨てて白糸の今くる人と思ひなさなむ
降る雨に出でて濡れぬわが袖の蔭にるながら沾ぢまざるかな

志賀の山越えにて、女の山の井に手洗ひ揃ひてのむを見て

揃ふ手の掬に濁る山の井の飽かでも人に別れぬるかな

三條の侍、方たがへに渡りてかへる朝に、掬に濁るばかりの歌いまだえ詠まじ

と侍りにれば、車に乗らむとしけるほどに

家ながら別るる時は山の井の濁りしよりも佗びしかりけり

和泉の國に侍りける程に、忠房朝臣、大和よりおくれるかへし

沖津浪高師の濱のはま松の名にこそ君を待ち渡りつれ

越なる人の許につかはしける

思ひやる越の白山しらねども一夜も夢にこえぬ日ぞなき

延喜の御時、中宮の屏風に

いづれをか標と思はむ三輪の山ありとしあるは杉にぞありける
獨りして世をし盡くさば高砂の松の常磐もかひなかりけり

三條右大臣の屏風に

玉藻かる蜚の行方さす棹の長くや人をうらみ渡らむ

年の終に人まち侍りける人のよみ侍りける

朝臣 っ

朝臣 づ

たのめつつ別れし人を待つ程に歳さへせめて怨めしきかな
しるしなき煙を雲に紛へつつ世を経て富士の山と燃えなむ
風吹けば常盤に浪こす磯なれやわが衣手のかはく時なし
足引の山下滾つ岩波の心碎けて人ぞ戀しき
足引の山下しけき夏草の深くも君を思ふころかな
懸けて思ふ人もなければ夕來れば面影たえぬ玉鬘かな

(古今)

恒

薩

イ常景、五位、坂上、自延喜十八年至延長三年

ある處に、近江といふ人をいと忍びて語り侍りけるを、夜明けて歸りける
を人見て囁きければ、その女につかはしける

鏡山あけて來つれば秋霧のけさや立つらむあふみてふ名は

(後撰)

經

衛

五位大和守、中宮大進藤原公業男、延久四年六月廿一日卒

時々物申しける女の眸に文をつかはしけるを、よもあらじとて返し侍りければ
つかはしける

尙も越え見てしかば逢阪はふみ違ふべき中の道かは
今はとて別れしほどの月をだに涙にくれて眺めやはせし

(千載)

(新古今)

列

樹

六位文章生壹岐守、雅樂頭春道新名男、延喜廿年任壹岐守

梓弓引けばもとする我が方によるこそまされ戀の心は

(古今)

得難かるべき女を思ひかけてつかはしける

數ならぬ深山隠れの郭公人知れぬ音を泣きつつぞ經る

(後撰)

と

富小路右大臣

從二位顯忠公、本院時平公男、天德四年右大臣康保三年薨六十八

朝臣 づ、と

朝臣と

あひしりて侍りける女を久しう訪はす侍りければ、いたうなむわび侍ると人の
告げ侍りければ

鶯の雲井にわびて鳴く聲を春の性とぞわれは聞きつる

(後撰)

徳大寺左大臣

正二位實能公、大納言藤原公實男

命だに果敢からずば年経ともあひ見むことを待たましものを

(金葉)

逢不遇戀をよめる

思ひきや逢ひ見し夜半の嬉しさに後の辛さの勝るべしとは

戀の心をよめる

わが戀の思ふばかりの色にいでば言はでも人に見えましものを

或る人、語らひける女のもとにまからむなど申しけれども、さばる事ありて罷
らざりければ、五月雨の頃おくりて侍りける、五月雨の空だのめのみ隙なくて
忘らるる名ぞ世にふりぬべき」とありけるかへし

俊

忠

從二位中納言、藤原忠家男

かくばかり常なき世とは知りながら人を遙かになに頼みけむ

(後撰)

時

望

從二位中納言、中納言平雅範男、天慶元年薨

文かよはしける女の異人にあひぬと聞きてつかはしける

いかでわれ強顔き人に身を代へて戀しき程を思ひ知らせむ

忘れむ名は世にふらじ五月雨もいかでか暫し小止まざるべき
ひと目見し人は誰れともしら雲の上の空なる戀もするかな

(平家)

女につかはしける

人知れぬ思ひ有磯の浦風に浪のよるこそ行かま欲しけれ

(金葉)

朝臣と

堀河院の御時鬘書合せによめる

朝臣と

あひしりて侍りける女を久しう訪はす侍りければ、いたうなむわび侍ると人の
告げ侍りければ

鶯の雲井にわびて鳴く聲を春の性とぞわれは聞きつる

(後撰)

徳大寺左大臣

正二位實能公、大納言藤原公實男

命だに果敢からずば年経ともあひ見むことを待たましものを

(金葉)

逢不遇戀をよめる

思ひきや逢ひ見し夜半の嬉しさに後の辛さの勝るべしとは

戀の心をよめる

わが戀の思ふばかりの色にいでば言はでも人に見えましものを

或る人、語らひける女のもとにまからむなど申しけれども、さばる事ありて罷
らざりければ、五月雨の頃おくりて侍りける、五月雨の空だのめのみ隙なくて
忘らるる名ぞ世にふりぬべき」とありけるかへし

俊

忠

從二位中納言、藤原忠家男

かくばかり常なき世とは知りながら人を遙かになに頼みけむ

(後撰)

時

望

從二位中納言、中納言平雅範男、天慶元年薨

文かよはしける女の異人にあひぬと聞きてつかはしける

いかでわれ強顔き人に身を代へて戀しき程を思ひ知らせむ

忘れむ名は世にふらじ五月雨もいかでか暫し小止まざるべき
ひと目見し人は誰れともしら雲の上の空なる戀もするかな

(平家)

女につかはしける

人知れぬ思ひ有磯の浦風に浪のよるこそ行かま欲しけれ

(金葉)

朝臣と

堀河院の御時鬘書合せによめる

朝臣と

家に歌合し侍りけるによめる

戀ひわびて獨り伏屋に夜もすがら落る涙や音なしの瀧

(詞花)

來てとどまらぬ戀

戀ひ戀ひてかひもなきさに沖津浪寄せてはやがて立ち返れとや

(千載)

中將に侍りける時、歌合し侍りけるに戀の歌とてよめる

わが戀は海人の荇藻に亂れつつかわく時なき浪の下草

名立戀といふ心をよみ侍りける

なき名のみ立田の山の立つ雲の行方もしらぬ眺めをぞする

(新古今)

家に戀十五首歌詠み侍りける時に

夜の間にも消ゆべきものを露霜のいかに忍べと頼めおくらむ

俊憲 從三位參議、少納言藤原通憲男

夢中契戀といへる心をよめる

姿こそ寢覺の床に見えずとも契りしことの現なりせば

(千載)

俊成 正三位、中納言藤原俊忠男

左京大夫顯輔の家にて歌合し侍りけるに詠める

心をばとどめてこそは歸りつれ奇しや何の暮れを待つらむ

(詞花)

おなじ家に百首の歌よみ侍りける時、初戀の心をよみ侍りける

照射する端山が末のした露やいるより袖はかく萎るらむ

(千載)

忍ぶる戀

いかにせむ室の八島に宿もがな戀の烟を空に紛へむ

思ひきや榻の端書搔きあつめ百夜も同じ末呂寢せむとは

法性寺殿にて五月の御供花の時、をのことも歌よみ侍りけるに、契後隱戀とへ

る心をよみ侍る

朝臣と

朝臣と

頼め來し野邊の道芝夏深かしいづくなるらむ鵲の草莖
忘るなよ夜々の契りをすが原や伏見の里の有明の月
戀をのみ飾磨の市にたつ民の絶えぬ思ひに身をや代へてむ

攝政右大臣の時、家の歌合に戀の心をよめる

逢ふことは身を代へてとも待つべきに世々を隔てむ程ぞ悲しき
奥山の岩垣沼の浮尊深き戀路になに亂れけむ
敷きしのぶ床だにたへぬ涙にも戀は朽ちせぬものにぞありける

隱名戀といへる心を

蝨が蒔る海松布を波に紛へつつ名草の濱をたづね侘びぬる

新古今

雨のふる日女につかはしける

思ひあまりそなたの空を眺むれば霞を分けて春雨ぞ降る
逢ふことを交野の里の笹の庵繁に露散る夜半の床かな

入道前關白右大臣に侍りける時百首の歌の中に忍戀

散らすなよ繁の莠のかりにても露かかるべき袖の上かは

片思ひの心をよめる

憂き身をばわれだに厭ふいとへただそをだに同じ心と思はむ

女につかはしける

よしさらば後の世とだに頼めおけ辛さに堪へぬ身ともこそなれ
哀れなり假寢にのみ見し夢の長き思ひに結ほほれなむ

和歌所の歌合に遇不逢戀の心を

夢かよ見し面影も契りしも忘れずながら現ならねば

崇徳院に百首の歌奉りける時戀の歌

思ひわび見し面影はさておきて戀せざりけむ折ぞ戀しき

知家

正三位、藤原顯家男

朝臣と

朝臣と

これもまた長き別れになりやせむ暮れを待つべき命ならねば

(新古今)

俊

蔭

四位備前權守、中納言藤原有徳男、至延喜廿一年

あひ知りて侍りける女の心ならぬやうに見え侍りければつかはしける
いづ方に立ち隠れつつ見よとてか同情なく人のなりゆく

(後撰)

敏

行

四位右兵衛督、按察使藤原富士磨男、寛平九年任右兵衛督

寛平の御時、後の宮の歌合の歌
戀ひわびて打ち寝る中に行き通ふ夢の直路は現なるらむ

(古今)

住の江の岸による浪夜さへや夢の通ひ路人目避くらむ
我がごとく物や戀しき郭公時ぞともなく夜ただ鳴くらむ

業平朝臣の家に侍りける女の許によみてつかはしける

徒然の長雨に増さる涙川袖のみ濡れて逢ふ由もなし

寛平の御時、後の宮の歌合の歌

明けぬとて歸る道には扱垂れて雨も涙も降り濡ちつつ

女の許に遣しける

わが戀の數を算へば天の原曇り塞がり降る雨の如

(後撰)

俊

頼

四位木工頭、大納言源經信男、天仁三年正月廿八日兼越前介

後朝の心を詠める

わが戀は朧ろの清水いはでのみ堰きやる方もなくて暮しつ

(金葉)

國信卿の家の歌合に夜戀の心をよめる

夜とともに玉散る床の菅枕見せばや人によるのけしきを

實行卿の家の歌合にこひの心をよめる

朝臣と

朝臣と

いつとなく戀に焦るるわが身より立つや淺間の煙なるらむ

權中納言俊忠卿の家にて、戀歌十首人々よみけるに、來不留戀といへる事をよめる

思ひ草葉末に結ぶ白露のたまたま來ては手にも溜らず

戀の歌をよみける處にてよめる

忘草しけれる宿を來て見れば思ひのきより生ふるなりけり

寄關戀をよめる

勿來といふ事をば君が言草を關の名ぞとも思ひけるかな

戀の歌、人々よみけるに詠める

淺ましやは何事のさまぞとよ戀せよとても生れざりけり

俊忠卿の家にて、戀の歌十首人々よみけるにおとしめてあはずといへる事をよめる

奇しきも嬉しかりけり卑しむるその言の葉にかかると思へば

堀河院の御時、百首の歌たてまつりける時、初戀の心をよめる

難波江の藻に埋もるる玉堅磐露はれてだに人を戀ひばや

早思

權中納言俊忠、かつらの家にてなき名たつ戀といへる心をよみ侍りける

立ちしより晴れずも物を思ふかななき名や空の霞なるらむ

權中納言俊忠の家に戀の十首の歌よみ侍りける時、祈れども逢はざる戀といへる心を

浮りける人を初瀬の山嵐よ烈しかれとは祈らぬものを

麻手ほす東處女の萱筵しき忍びても過すころかな

これを見よ六田の淀に叉手さして萎れし賤の麻衣かは

笹芽苜る荒田の澤に立つ民も身のためにこそ袖も濡るらめ

年をへたる戀といへる心をよみ侍りける

朝臣と

朝臣と
君戀ふと鳴海の浦の濱はま秋萎あきしれてのみも年をふるかな

(新古今)

初會戀の心を
蓋かきの屋やの賤しづ機た帯おびのかた結び心やすくも打解くるかな

知房

四位美濃守、越中守藤原良宗男、至長治三年

物申しける人の前中宮にまわりにつけければ、名残りを戀ひて月のあかりける夜
いひつかはしける

面影は數ならぬ身に戀ひられて雲井の月を誰れと見るらむ

(金葉)

整

五位、參議源等男、至承平五年

文など遣しける女の異男ことなかにしにつき侍りけるに遣しける

われならぬ人住の江の岸えに出て難波なればの方かたをうらみつるかな

(後撰)

敏仲

五位伊賀守、中納言橋公頼男

わび人の濡ぬつてふなる涙川なみ下立くだたちてこそ濡れ渡りけれ

(後撰)

大輔、右の歌のかへしとて、「ふち瀬とも心もしらす涙がほ下りやたつべき袖の
ぬるるに」とありければ、又返し

試こころみになほ下立くだたたむ涙川なみ嬉こころしき瀬にも流れあふやと

時雨

五位備後守、藤原四照男、至康保四年

物いひ侍りける女に年の果の頃ほひ遣しける

新玉あらたまの年は今日明日けふあした越えぬべし逢阪山おうさかをわれや後おくれむ

(後撰)

時昌

五位大學助、筑後守藤原盛房男、至保延四年

法性寺入道、内大臣に侍りける時の歌合に尋ねうしなふ戀といへる心をよめる

等閑なほざりに三輪の杉とは教へおきて尋ぬる時は逢はぬ君かな

(千載)

朝臣と

朝臣と

友則

六位大内記、宮内權少輔紀有朋男

宵のまも果敢なく見ゆる夏蟲なつむしに惑まどひまされる戀もするかな
 夕來ゆふきれば螢ゆらよりけに燃もゆれども光見ねばや人の強顔つれなき
 笹の葉あしはにおく霜しもよりもひとり寢ねるわが衣手ころもてぞ冴さえ優まりける
 わが宿の菊の垣根かきに置く霜の消えかへりてぞ戀しかりける
 川の瀬せに靡なく玉藻たまもの水みづ隠かくれて人に知られぬ戀もするかな
 宵々に脱ぬぎてわが寢ねる狩衣かりころも懸かけて思はぬ時の間まもなし
 東路とうぢの小夜こよの中山なかつやまなかなかなに何なにしか人を思おもひ初はじめけむ
 敷妙しきたへの枕まくらの下したに海うみはあれど人ひとをみるめは生おひすぞありける
 年としを経て消きえぬおもひはありながら夜よるの袂たもとはなほ凍こりけり
 言ことにいでて言ことはぬばかりぞ水無瀬みなせ川下かはしたに通かよひて戀こしきものを
 命いのちやは何なにぞ葉露はづゆの徒物あだものを逢あふにし代かへば惜をしからなくに

(古)

寛平の御時、后の宮の歌合の歌

紅くれないの色いろには出いでて隠かくれ沼ぬのしたに通かよひて戀こは死しぬとも
 下したにのみ戀こふれば苦くるし玉たまの緒いとの絶たえて亂みだれむ人ひとな咎とがめそ
 我が戀こを忍しのびかねては足曳あしびきの山橋やまはしの色いろに出いぬべし
 春霞はるかすみ柵さし引ひく山の櫻花はなみれども飽あかぬ君きみにもあるかな

寛平の御時、后の宮の歌合の歌

蟬せみの聲こゑ聞きけば悲かなしな夏衣なつころも薄うすくや人のならむと思おもへば
 雲くももなく風かぜぎたる朝あさの我われなれやいとはれてのみ世よをば經たぬらむ
 秋風あきかぜは身みを別わかきてしも吹ふかなくに人の心こゝろの空そらになるらむ
 水の沫あはの消きえてうき身みといひながら流ながれて猶なほも頼たのまるるかな
 浮うきながら消けぬる沫あはともなりなむ流ながれてとだに頼たのまれぬ身みは
 わが心こゝろいつならひてか見みぬ人を思おもひやりつつ戀こしかるらむ

(後)

朝臣 ぞ、な

身よりあまれる人を思ひかけてつかはしける

玉藻刈る海人にはあらねど渡津海の際涯も知らず入る心かな

返事も侍らざりければ又重ねて遣しける

みるもなくめもなき海の磯に出てかへるがへるもうらみつるかな

な

中院入道右大臣

正二位雅定公、久我源雅實男

逢ふ事はいつとなぎさの濱千鳥波の立居るねをのみぞ泣く

晩の戀といへる事を詠める

あふ事を今宵と思はば夕附日入る山の端も嬉しからまし

等思兩人といふ事をよめる

何處をも夜離るる事の理なきに二つに分るわが身ともがな

(金葉)

(詞花)

慎めども涙に袖の顯はれて戀すと人に知られぬるかな

(千載)

花園左大臣の家に侍りける女に、まだ中納言など申しける頃物申し渡りけるを、
離々になりければ思ひや絶えにけむ、前山城守なりける者に物申すと聞きて
いひ遣しける

まことにや三年も待たで山城の伏見の里に新枕する

成

通

正二位大納言、大納言藤原宗通男

戀の歌として詠める

後の世と契りし人もなきものを死なばやとのみいふぞ儂なき

(金葉)

冬戀といへる事を

水の上に降る白雪の跡もなく消えやしなまし人の酷さに

左京大夫顯輔が家に歌合し侍りけるによめる

他ながら哀れといはむ言よりも人傳てならで厭へとぞ思ふ

(詞花)

朝臣 ぞ

朝臣 ぬ

慎めども耐へぬ思ひになりぬれば問はず語りのせまほしきかな
逢不逢戀といへる心をよみ侍りける (千載)

あひ見むといひ渡りしは行末の物思ふ事の端にぞありける

長方 從二位中納言、中納言藤原顯長男

紀の國や由良の湊に拾ふてふ偶々にだに逢ひ見てしがな
(新古今)
戀しなむ同じ憂名をいかにして逢ふにかへつと人にいはれむ

成範 正二位中納言、少納言藤原通憲男

かかりける歎きは何の報いぞと知る人あらば問はましものを
(千載)
戀ひ侘びてうち寝る宵の夢にだに逢ふとは人の見えばこそあらめ

成家 正三位、藤原俊成男

戀の歌としてよめる

戀をのみしぐるる空の浮雲は曇りも敢へず袖濡らしけり
(千載)

業平 四位左中將、阿保親王御子、天慶三年正月廿八日卒

右近の馬場の引折の日、むかひにたてたりける車の下簾より、女の顔の仄かに
見えればよみて遣しける

見ずもあらず見もせぬ人の戀しくは文なく今日や眺め暮さむ
(古今)

彌生のついでたちより、忍びに人に物をいひて後に、雨のそほ降りけるに詠みて
遣しける

起きもせず寝もせで夜を明しては春の物とてながめ暮しつ

敏行朝臣、業平朝臣の家に侍りける女の許にこみて遣しける、「つれづれの眺め
にまさる涙川袖のみ濡れて逢ふ由もなし」との歌に、彼の女に代りて返しに詠
める

朝臣 ぬ

朝臣 ぬ

浅みこそ袖は沾づらめ涙川身さへ流ると聞かば頼まむ
秋の野に篋分けし朝の袖よりも逢はで來し夜ぞ沾ぢ優りける

東の五條わたりに人を知りおきて罷り通ひけり、忍びなる所なりければ門より
しも入らで垣の崩れより通ひけるを、度重りければ主人聞きつけて、かの道に
夜毎に人を伏せて守らすれば、行きけれど得逢はでのみ歸りてよみてやりける
人知れぬわが通ひ路の關守は宵々毎に打ちも寝ななむ
人に逢ひてあしたによみて遣しける

寝ぬる夜の夢を果敢なみ微睡めば彌憊なにもなりまさるかな

業平朝臣の伊勢の國にまかりける時、齋宮なりける人にいと密かに逢ひて、又
のあしたに人やる術なく思ひをりける間に、女の許よりおこせたりける、「君や
來しわれや行きけむおもほえず夢かうつつか寢てか覺めてか」とありければ、
返し

搔き暗す心の闇に惑ひにき夢現とは世人定めよ

深切に思ひおもはず訪ひ難み身を知る雨は降りぞまされる

藤原敏行の朝臣の業平の朝臣の家なりける女を逢ひ知りて文遣せける言葉に、
今まうで來、雨の降りけるをなむみ煩ひ侍るといへりけるを聞きて、彼の女に
かはりて詠めりける

ある女の業平の朝臣をとこ定めず歩きすと思ひてよみつかはしける、「大幣の
引く手数多になりぬれば思へどえこそ頼まざりけれ」との歌のかへし
大幣と名にこそたてれ流れても終に寄る瀬はありてふものを

五條の後の宮の西の對に住みける人に、本意にはあらで物言ひ渡りけるを睦月
の十日あまりになむ、外へ隠れるける、在所は聞きけれど、え物もいはで又の
年の春、梅の花ざかりに月のをもしろかりける夜、去年を戀ひてかの西の對に
いきて月の傾く迄、あはらなる板じきに臥せりてよめる

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

小野の貞樹、業平の朝臣組の有常が女にすみけるを恨むる事ありて、しばしの

朝臣 ぬ

朝臣 ぬ

問晝は来て夕さは歸りのみしければよみて遣しける、天雲のよそにも人のな
り行くかすがにめには見ゆるものから」とありければ、かへし
行き歸へり空にのみしてふることはわが居る山の風早みなり

人の許にしばしばまかりけれどあひ難く侍りければ物にかきつけ侍りける

暮れぬとて寢て行くべくもならなくに尋思る尋思るも歸る優れり (後撰)

戀しきに消えかへりつつ朝露の今朝はおきるむ心地こそせね

伊勢の海に遊ぶ蟹ともなりにしか浪かき分けて海松布潜かむ

久しくいひ渡りけるにつれなくのみ侍りければ

頼めつつ逢はで年ふる偽りに懲りぬ心を人は知らなむ

女に物いひはじめて障ること侍りてえまからでいひ遣し侍りける

かからでもありしに物を白雪の一日もふれば増さる我が戀

(拾遺)

染川を渡らむ人のいかでかは色に馴るてふ事のなからむ

女につかはしける

春日野の若紫の摺り衣しのぶの亂れかぎり知られず

(新古今)

みるめ刈る方や何處ぞ棹さしてわれに教へよ海人の釣舟

思ふには忍ぶる事ぞ負けにける逢ふにしかへば遮莫

出でて去にし跡だにいまだ變らぬに誰が通ひ路と今はなるらむ

梅の花香をのみ袖に停めおきてわが思ふ人は訪れもせぬ

仲

實

四位宮内卿、越後守藤原能成男、至天仁元年

鳥羽殿の歌合に戀の心をよめる

夜とともに袖の乾かぬわが戀や富島が磯によする白浪

(金葉)

汲み見てし心ひとつを導にて野中の清水忘れやはする

(詞花)

射翳差す賤男の身にも耐へかねて鳩吹く秋の聲立てつなり

朝臣 ぬ

朝臣 ぬ

成^{ナリ}

仲^{ナカ}

四位、日吉禰宜祝部成實男、至建久二年(イ三年)

君戀ふる涙時雨とふりぬれば信夫の山も色づきにけり

(千世)

中^{ナカ}

興^{ナキ}

五位左衛門權佐、右大辨平季長男、(イ内膳正忠望王子) 至延長八年卒

戀しきも思ひ込めつつあるものを人に知らるる涙なになり

(後撰)

中^{ナカ}

正^{マサ}

五位肥前守、右衛門佐源幸年男

まだ年若かりける女につかはしける

葉を若み穂にこそいでね花薄下の心に結ばざらめや

(後撰)

女のもとに遣しける

近江路を案内なくとも見てしがな關の此方は侘びしかりけり

成^{ナリ}

國^{クニ}

五位播磨守、伊豫介藤原連永男、天曆八年四月廿日卒

朝臣 ぬ

秋の田のかりそめ臥しもしてけるが徒らいねを何に摘ままし

(後撰)

長^{ナガ}

能^{ノシ}

五位伊賀守、伊勢守藤原倫寧男、寛弘六年任伊賀守

稻荷に詣でて懸想しはじめて侍りける女の異人にあひ侍りければ

われといへば稻荷の神も酷きかな人の爲とは祈らざりしを

(拾遺)

心懸けたる人につかはしける

汲みて知る人もあらなむ夏山の木の下水は草隠れつつ

(後拾遺)

厭ふとは知らぬにあらず知りながら心にもあらぬ心なりけり

算ふれば空なる星も知るものを何を酷さの數にとらまし

わが心變らむものか瓦屋の下焚く煙わきかへりつつ

雨の降り侍りける夜、女に

朝臣 ぬ

搔暗す雲間も見えぬ五月雨は絶えず物思ふわが身なりけり

女につかはしける

藻屑火の磯間を分くる漁舟仄かなりしに思ひ初めてき

人につかはしける

思ふ事いは間に蒔きし松の種千世と契らむ今はねさせよ

情もなくなりぬる人の玉章を憂き思ひ出の形見ともせじ

柔かに寝る夜もなくて別れぬる夜々の手枕何日か忘れむ

たのめたる事跡なくなり侍りにける女、久しくありてとひ侍りける返事に

徒言の葉におく露の消えにしをあるものとてや人の問ふらむ

(新古今)

仲文

五位上野介、改國茂、陸奥守藤原公葛男、至貞元八年

年頃絶えにける女の樽といふものたづねたりけるにつかはすとて

花咲かぬ朽木の杣の杣人のいかなるくれに思ひ出づらむ

(新古今)

成助

五位、神主賀茂成直男、天喜四年十二月九日叙外従五位下行幸賞

つれなき女につかはしける

いかばかり人の酷さを怨みまし憂き身の咎と思ひなさずば

(新古今)

女の許にまかりて、心地例ならず侍りければ歸りて遣しける

誰れ行きて君に告げまし道芝の露もろともに消えなましかば

(新古今)

永寶

五位信濃守、太皇太后宮大夫藤原清家男、永久二年正月五日叙従五位上

女の許につかはしける

磨る墨も落つる涙に洗はれて戀ひしとだにもえこそ書かれね

(金葉)

藏人にて待りける頃、内をわりなく出て女のもとにまかりてよめる

三日月の朧ろけならぬ戀しさにわかれてぞ出る雲の上より

朝臣 ぬ

朝臣 な

いたづらに千束朽ちにし錦木をまた戀りづまに思ひたつかな

(詞花)

仲 綱

五位伊豆守、從三位源賴政男、至安元二年

心さへわれにもあらずなりにけり戀は姿のかはるのみかは

(千載)

攝政右大臣の時、百首の歌よませさ待りける時、遇不逢戀を詠める

棲み馴れし佐野の中川瀬絶えして流れ變るは涙なりけり

仲 賴

五位筑後守、左衛門尉源資遠男、至久治三年

厭はるるその由縁にていかなれば戀はわが身を離れざるらむ

(千載)

長 明

五位、禰宜鴨長繼男、應保元年十月七日中宮叙爵

思ひあまりうち寢る宵の幻も浪路を分けて行き通ひけり

(千載)

隔海路戀といへる心をよめる

頼みおく人もながらの山にだに小夜更けぬればまつ風の聲
眺めても哀れと思へ大方の空だに悲し秋の夕暮れ

(新古今)

成 親

六位鳥羽院所衆、藤原

枯れ果つる小笹がふしを思ふにも少なかりけるよよの數かな

(千載)

鳥羽院の御時、藏人所に侍りける時、女にかはりてよめる

西宮左大臣

正二位高明公、延喜帝御子

須磨の蜚の浦漕ぐ舟の跡もなく見ぬ人戀ふるわれや何なる

(後拾遺)

女のもとにつかはしける

さりともと思ふ心に引かされて今まで世にも経るわが身かな

朝臣 な、は

朝臣 な

いたづらに千束朽ちにし錦木をまた戀りづまに思ひたつかな

(詞花)

仲 綱

五位伊豆守、從三位源賴政男、至安元二年

心さへわれにもあらずなりにけり戀は姿のかはるのみかは

(千載)

攝政右大臣の時、百首の歌よませさ待りける時、遇不逢戀を詠める

棲み馴れし佐野の中川瀬絶えして流れ變るは涙なりけり

仲 賴

五位筑後守、左衛門尉源資遠男、至久治三年

厭はるるその由縁にていかなれば戀はわが身を離れざるらむ

(千載)

長 明

五位、禰宜鴨長繼男、應保元年十月七日中宮叙爵

思ひあまりうち寢る宵の幻も浪路を分けて行き通ひけり

(千載)

隔海路戀といへる心をよめる

頼みおく人もながらの山にだに小夜更けぬればまつ風の聲
眺めても哀れと思へ大方の空だに悲し秋の夕暮れ

(新古今)

成 親

六位鳥羽院所衆、藤原

枯れ果つる小笹がふしを思ふにも少なかりけるよよの數かな

(千載)

鳥羽院の御時、藏人所に侍りける時、女にかはりてよめる

西宮左大臣

正二位高明公、延喜帝御子

須磨の蜚の浦漕ぐ舟の跡もなく見ぬ人戀ふるわれや何なる

(後拾遺)

女のもとにつかはしける

さりともと思ふ心に引かされて今まで世にも経るわが身かな

朝臣 な、は

朝臣に

女につかはしける

現まにて夢ばかりなる逢ふ事を現まばかりの夢になさばや
忘れなむそれも怨みず思ふらむ戀ふらむとだに思ひおこせよ
打ち忍び泣くとせしかど君戀ふる涙は色に出でにけるかな
他まにふる人は雨とや思ふらむわが目に近き袖の雫しづくを

日に添へて憂きことののみも増さるかな暮れては戀まて明けずもあらなむ
契りあらば思ふがごとくも思はまし奇あやしや何の酬むかいなるらむ
今日けふ死なば明日あしたまで物は思はじと思ふにだにも叶はぬぞ憂き

九條右大臣の女にはじめて遣しける

(新古今)

年月はわが身に添ひて過ぎぬれど思ふ心の行かずもあるかな
初雁はつかりのはつかに聞きし言傳ことづつても雲路くもぢに絶えて侘わぶる頃かな

野宮左大臣

從一位公繼公、後徳大寺藤原實定男

和歌所歌合に依忍増戀といふことを

忍しのばじよ石間傳いしまつたひの谷川も瀬を堰せきくにこそ水増さりけれ

(新古今)

教のり

長なが

正三位參議、大納言藤原忠教男

百首の歌奉りける時、戀の歌としてよめる

いかばかり戀路こひぢは遠きものなれば年は逝いけども逢瀬あふせなからむ

(千載)

百首歌奉りける時、戀の心をよめる

戀しさは逢ふを限りと聞きしかどさてしもいとど思ひ初はめけり

十首の歌、人のよませ侍りける時詠める

朝臣の

朝臣の

よしさらば君に心を盡してむまたも戀しき人もこそあれ

範 兼

從二位、式部少輔藤原能兼男

妹が邊流るる川の瀬に寄らば泡となりても消えむとぞ思ふ

(千載)

二條院の御時、うへのをのことも百首の歌奉りける時、忍戀の心をよめる

月待つと人には言ひて眺むれば慰め難き夕暮れの空

二條院の御時、艶書の歌召しけるに

忘れゆく人ゆる空を詠むれば絶え絶えにこそ雲も見えけれ

(新古今)

範 永

四位攝津守、尾張守藤原仲清男、康平八年六月十三日遷任紀伊守

公任卿の家にて、紅葉、天橋立、戀と三の題を人によませ侍りけるに、遅くまかり

て人々みな書きける程なりければ、三の題をひとつによめる歌

戀ひ渡る人に見せばや松の葉も下紅葉する天の橋立

(金葉)

山寺にこもりて、日頃侍りて女の許へいひつかはしける

氷して音はせねども山川の下は流るるものと知らずや

(詞花)

女につかはしける

辛かりし多くの年は忘られて一夜の夢を哀れとぞ見し

(新古今)

登

貞朝臣五位備中守、仁明帝御子、至寛平六年

獨りのみながめふるやのまつなれば人を忍ぶの草ぞ生ひける

(古今)

則 成

五位周防守、備後守源道成男、至萬壽三年

月あきき夜、ながめしける女に年経て後つかはしける

年も経ぬ長月の夜の月影の有明方の空を戀ひつつ

(後拾遺)

範 綱

本名雅清、五位左馬助、散位藤原永雅男

朝臣の

朝臣の

左衛門督家成、歌合し侍りけるによめる

住吉の淺澤小野の忘れ水たえだえならで逢ふ由もがな

(菊花)

惟規

五位、越後守藤原爲時男、至寛弘八年

霜枯れの萱が下折れとにかくに思ひ亂れて過す頃かな

(後拾遺)

父の許に、越の國に侍りける時、重くわづらひて京に侍りける齋院の中將が許に遣しける

都にも戀しき事の多かればなほこのたびはいかむとぞ思ふ

人を怨みてつかはしける

池に棲む我が名ををしの取返す物にもがなや人を怨みじ

(金葉)

人を怨みてつかはしける

島風に屢立つ浪のたちかへりうらみてもなほ頼まるるかな

頼めとや辭とやいかにいな舟の暫しと待ちし程も經にけり

(千載)

は

法性寺入道前關白太政大臣

從一位攝政關白忠通公、富家藤原忠實男

(金葉)

いはぬまは下這ふ蘆の根をしけみ隙なき戀を人知るらめや

旅宿戀を

見せばやな君忍び音の草枕玉貫き掛くるたびの景色を

人々に戀の歌よませ侍りけるに人にかほりて

心ざし淺茅が末におく露のたまさかに問ふ人は頼まじ

寄花戀

徒なりし人の心にくらぶれば花も常盤の物とこそ見れ

寄水鳥戀

朝臣の、は